



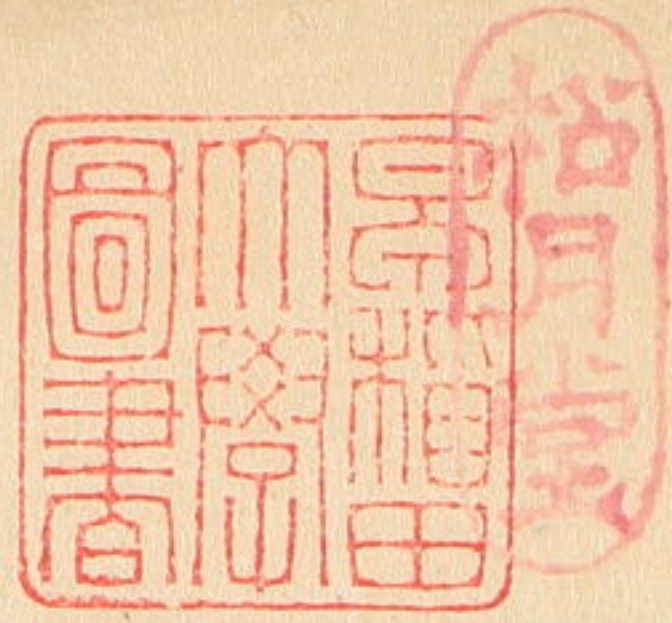
三國七言傳圖會

本館之卷

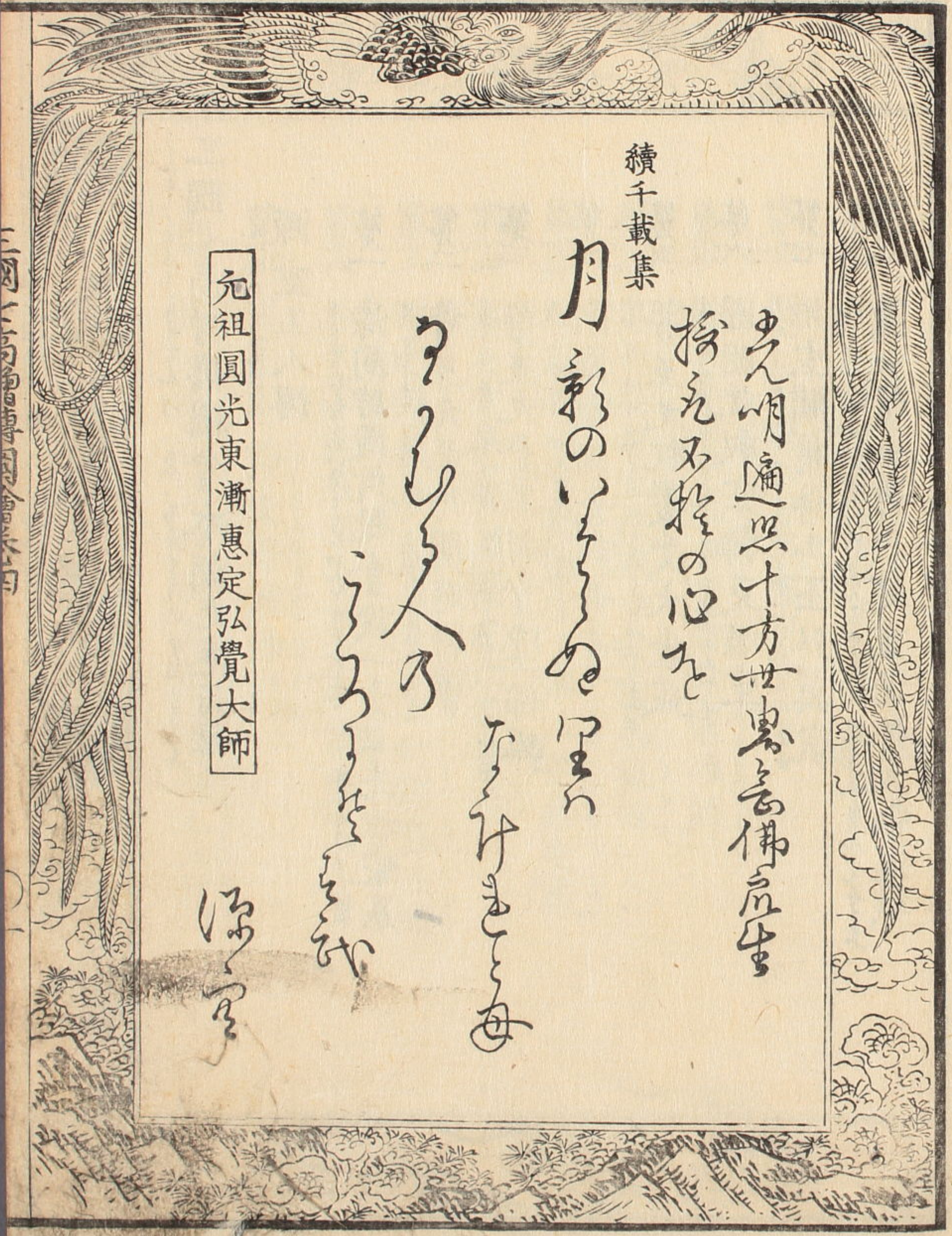
四

湖
605
X





川原 山田 宗茂 宗茂 宗茂



續千載集

光明遍照十方世界
無量壽佛莊嚴
捨瓦石於心在

月影のいづる心

不けん

たし

いづる心

元祖圓光東漸惠定弘覺大師

海

三國七高僧傳圖會本朝之卷目錄

源空上人傳

- 第一 漆間時國祈觀音設一子並先祖家系
- 第二 勢至九匿竹間暗射雙
- 第三 勢至九登菩提寺學佛經
- 第四 阿闍梨源光試奇童
- 第五 勢至九祝髮受大衆戒
- 第六 圓明就叔空諱更源空
- 第七 源空闡揚淨土丕弘真宗
- 第八 東大寺大佛再建重源任大勸進職

- 第九 於上西門院說戒並小蛇生天上
- 第十 遠刈櫻池來由
- 第十一 於大原勝林院源空論諸宗碩師
- 第十二 重衡請源空授戒並於南都被誅
- 第十三 維盛粉川寺謁源空並奉法華經受戒
- 第十四 東大寺供養並學匠功德議論
- 第十五 明遍僧都夢想並蓮臺野鬪體供艱
- 第十六 於女院說戒並免免畜業生天上
- 第十七 耳四即悔先非歸佛門
- 第十八 於仙洞諸宗碩德談聖道淨土二門

第九 顯真法印迂化並靈山寺不斷念佛奇異
後白河法皇崩御

第十 源空在靈山修不斷念佛並異光照堂內

第十一 東大寺大佛供艱并俊兼坊重源之傳

第十二 津戸爲守問有智無智教化差別

第十三 源空於月輪殿談義并熊谷真實之傳

第十四 因月輪殿請源空著選擇集并庵室房籠

第十五 三井僧正公胤破迂擇並燒淨土決疑抄

第十六 桓舜僧都閣聖道歸淨土法門

第十七 明惠著摧邪輪破選擇

第九 雲朗僧正詰選擇並山門蜂起

第十 南都北嶺再嗽訖並源空處流刑

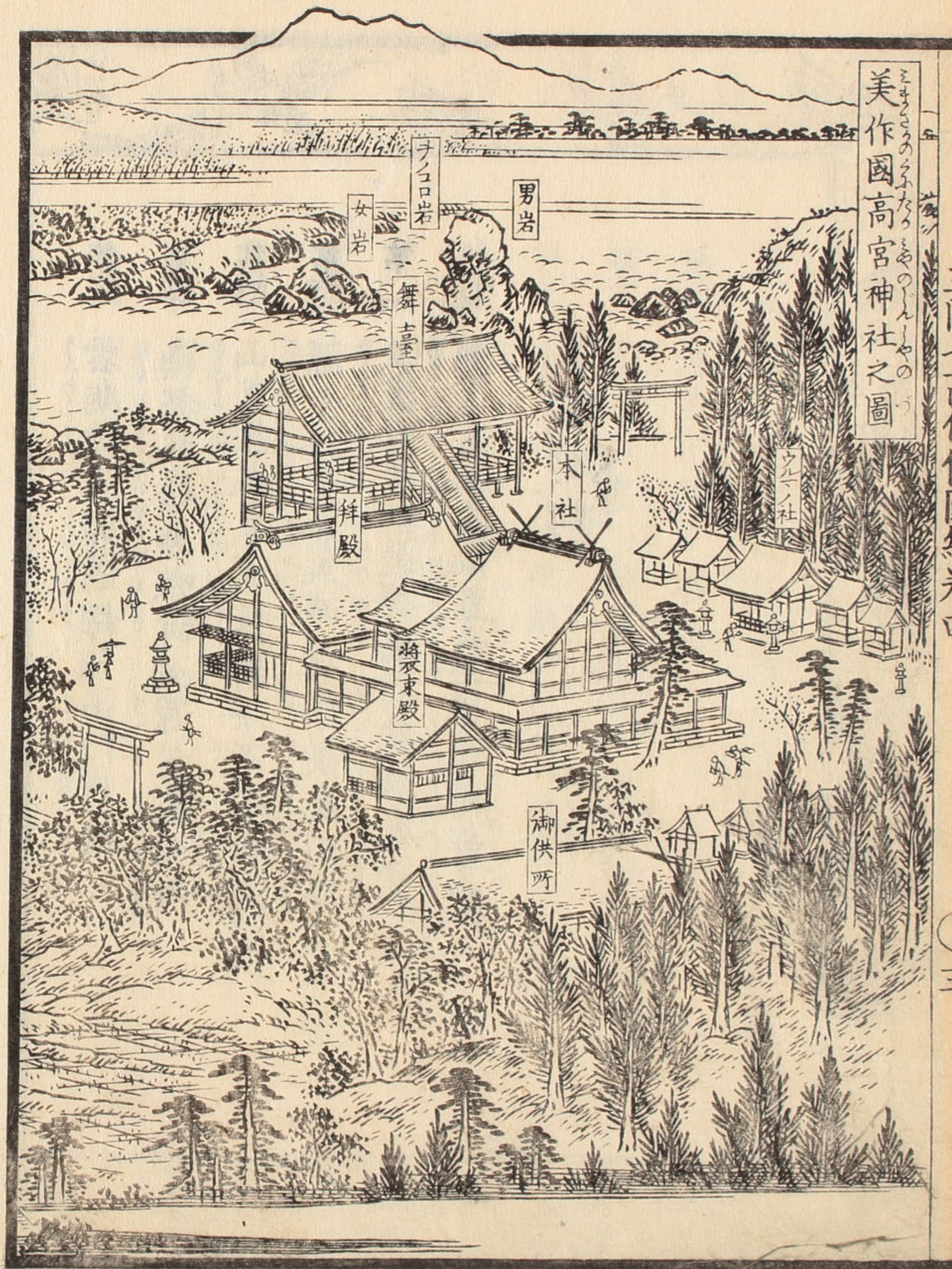
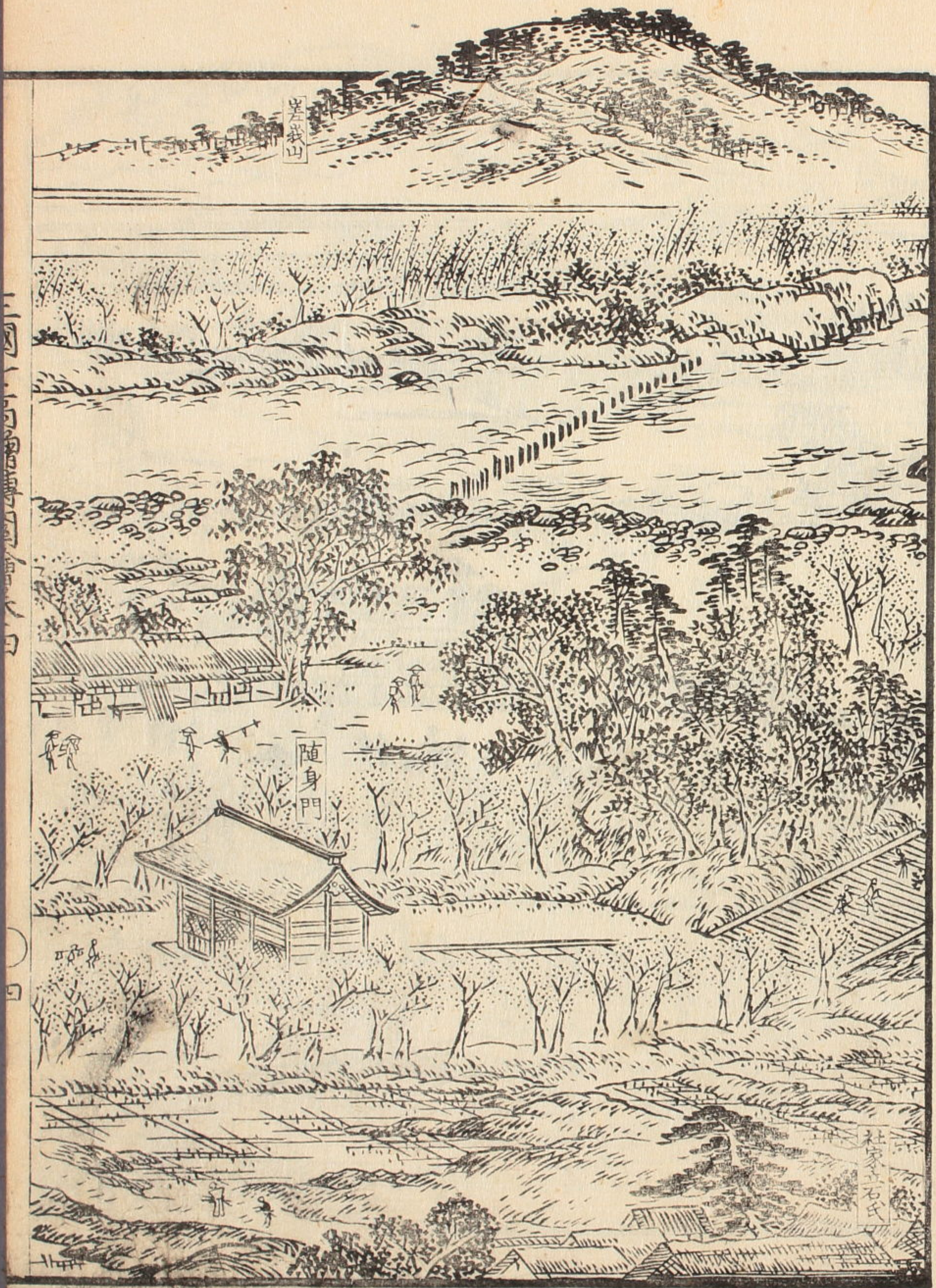
第十一 山王猿春日鹿怪異并源空勅免

第十二 源空於大谷入滅並勢觀房曰緣

第十三 波畫豎者破選擇並台徒壞廟堂

第十四 粟生之丘茶毗尊骸並勅賜尊號

目錄畢



三國七高神傳圖卷四

美作國高宮神社之圖

男岩

女岩

舞臺

本社

將衣東殿

神供所

社家石氏



三國七高僧傳圖繪卷四

押領使左衛門尉漆間時國



人皇五十四代仁明天皇之御宇西三條右大臣源光公六世孫式部太郎源年於作列娶漆間元國之女生男子元國無子使外孫盛行嗣家時改源氏号漆間盛行其三代孫時國云云

時國之一子勢至丸



父漆間時國母養氏十五之時剃髮受戒号圓明十八而改名為法然房源空四十三而弘淨土專念之宗念佛往生真門之元祖也

○續日本紀云元明天皇和銅六年割備前六郡始置美作國云
 拾苴抄云用野苦南苦北吉野加四郡爲十一郡云今無用野郡
 英多吉野勝田南勝田北久米南久米北苦東苦西大庭真嶋
 當國一宮中山神社 苦西郡三宮 祭神大己貴命貞觀十年四月神階正三位
 同二宮高野神社 延喜式神名帳小出美作國十一座の一
 振社漆間神社 木社の傍にあり祭神神官立石氏の祖神なり是則漆間の元國の
 源空上人の傳ふところ神護大元國當高野神社の大官司なり或ハ神戶太夫とあり兩名
 當社高野の神境ハ作陽最第一の勝地なり前小飛泉ありて白浪ありて
 馬の駈る如く或ハ淵小とまり堰高浪打らゆる音喧しく松林響々
 後ハ檜杉の大樹蔚茂して森々なり神門ハ飛驒の匠の造とて門守の立像ハ
 頗る古作ありて幾とてとあり右大將頼朝卿の時梶原源太景季普請
 奉行して當社と修補と後世尼子毛利赤松赤松等の家々より再興有

古社領石 馬場條長くして左右小櫻の列樹あり傍小雲梯社の古跡あり
 て千歳と経たる棕の大樹繁茂し左右小蔓とて下枝小杖し恰も生花の
 如し根小石の玉垣と園一碑石と建慶長五年と築此地近世
 大樹陰森として晝とてと冥々たり是雲梯の社の古跡の證なりと云
 樹下小池あり 萬葉集小宮の 大鳥居の額ハ高野大明神の五字二行小書す
 弘法大師の筆なりと云 南方廣く久米の更山と云
 右手小嵯峨山ありて下小大堰あり幾ど都の嵯峨小彷彿たり河下小誕
 生寺 源空上人誕生の旧跡なり 稲岡の庄 小至る横渡り有河上の淵小男岩女
 岩とて雄雄の灵石あり男の方ハ龜頭の如く陽根小似たり女岩の方ハ
 低く陰門小似て男岩小障か如し 満水のときハ折々隱るるやあり
 此淵小のそとて天王鼻とて地ありて後鳥羽院此所より久米更山と
 觀覽すして御製ありて名所なり又此河の水源ハ伯因の國界なり

高山より出ると下へ十八里の間流れて備前國金岡出て海へ又馬場の鳥居前より十八東あり古松左右の街に連々して菅繩手と号す津山の城下の入口あり社頭の西二十丁計小院の庄あり地あり元弘の乱小後醍醐天皇隱岐國小遷幸の時行宮の古跡あり所謂備後三郎高德志と官軍も通じ此行宮も潜び入庭上の櫻樹の皮を斫りて二聯の句を書て云く君莫忘勾踐時非魚范蠡と而して其志を顯すと云其古木枯朽て後世尚裁つてて世々も愛く晩春の頃花爛熳と日傍も碑石と建森家の儒臣江村俊軒の撰○此等の條への巻の終りへ説話されも古を考ふ癖あり餘紙ふすまて記添の。看客疑惑まへへ

○本朝孝子傳云貞觀年中美作國久米郡稻岡の庄の人あり父ハ時國母ハ能親つて親死るの後常小墳墓と守る位三階小叙課役と蠲門閭也表一衆庶小知しむと云峯ざら小源空工人の母秦氏の祖是らん

三國七高僧傳圖會本朝之卷本

杓杞菴一禪居士編輯

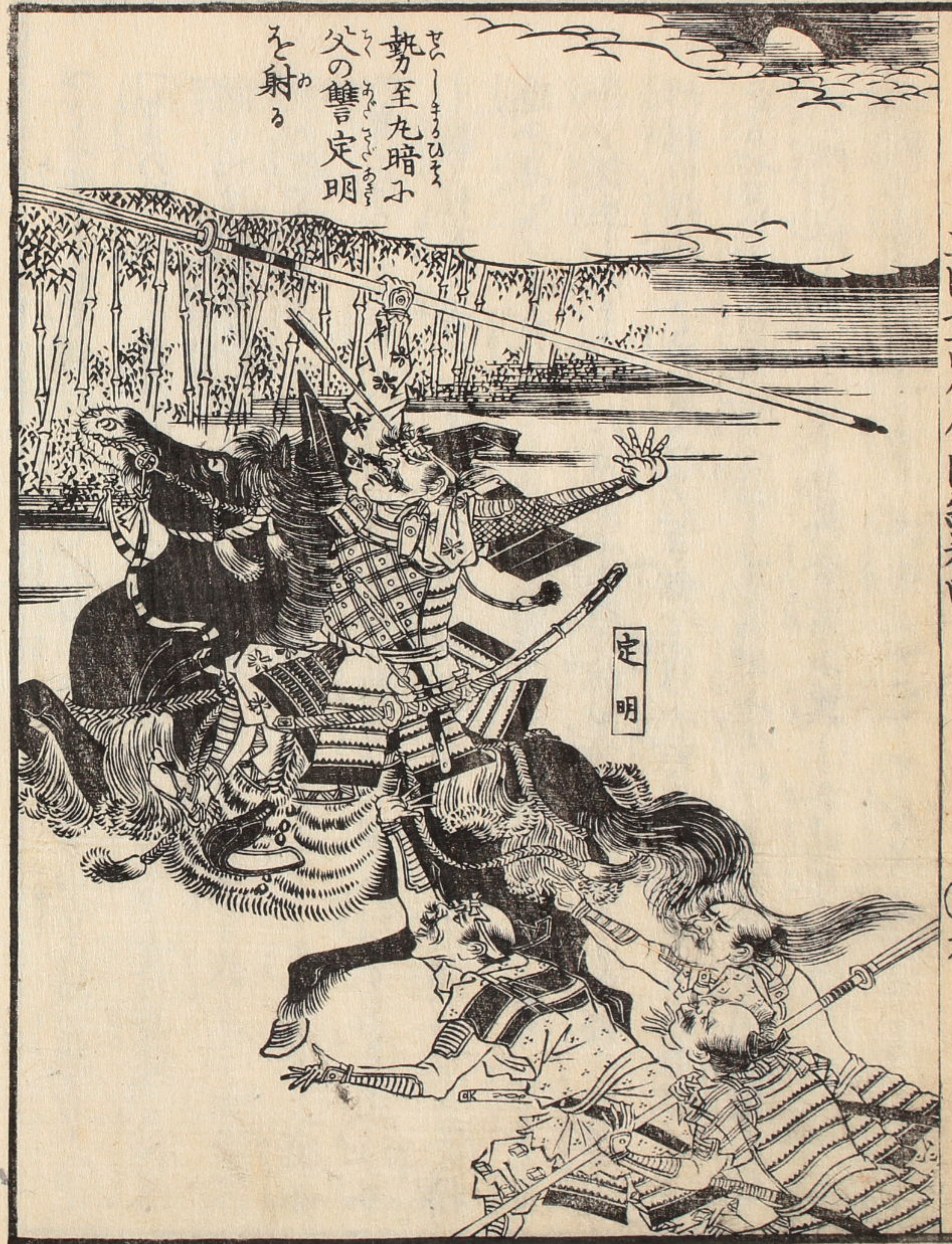
○源空上人傳

本傳曰釋源空姓の漆間氏美作國久米郡稻岡の庄の人あり父ハ時國母ハ秦氏其子ありて以て共小佛神と祈る母の夢小剃刀と吞と見て覺て姓あり是と夫小語る夫の曰汝の姓とら必男子小て後帝の戒師とまらるべしと母則ち心を佛氣小飯して口小羶葷と断く身と慎み長承二年四月七日午時小生る其時天より二の幡降るて其奇瑞と呈と頭圩して接あり眼黄小して光あり性世の児と異小して小児の戯と喜び起居奉動尋常ありと動とこれ西の壁小向ふ辟あり

一説云元祖法然上人の美作國久米南条稻岡の北の庄一書云稻岡の庄の人也父ハ藤官左衛門尉漆間の時國母ハ秦氏の人あり抑時國の先祖と尋ふ

右大臣元光より六代の孫。式部大輔元俊。陽明門一書陽明院。少して内藏人頭。兼高と殺害せし罪科ありて美作の國へ配流せし。爰に當國の廳官神護大夫漆間元國一人の女子と持。彼婿として男子と設る。重國と号し其子を親國と号す。其嫡子小時國と号て外祖の家とつ。彼時國の先祖は流人として所帶ありし。財宝乏しく。春属室小満て繁昌と。介有と。歳とて小三十小命をて一人の子あり。一時時國妻女小相語て曰。我一人の子あり。一期つゝそのら後世と訪をのき。又其跡の絶せん事の悲しきと云はれ。妻女自らも此とて歎き候。ちうづらうん。遊君遊女も相語して。君達と設けなす。自乳母として育奉らんとす。時國は夫然りとす。同く汝ら服小設とて二人の中。小育とんれと。妻の云くまは昔より今に至るまで。佛神小祈るとの叶はんと物語も傳ふら。勝尾寺の勝如上人。横河の惠心僧都。共小祈て設りける鐘愛の子ときけべ。我その悲願小漏

へ小水とて夫婦心を一めて。同國菩提寺とて。山寺の救世觀音小詣て。一七日の祈願とあり。丹誠と抽んで祈りける程。七日満づる夜の夢。不貴僧忽然とつれ。太刀の刺れと妻女へあり。是と飲べし必子と設ると。告めよ。より。危き口と開きて。刃と吞みて。夢と見えて。是よりして懷妊の身とあり。妻女へ時國小祈りて。新造の別室小引とあり。日毎小沐浴し。新衣と着し。身小香水とめり。口小生息との五幸の類いと食せ。精進小身とつ。月盈て長承二年四月七日午剋。母小産ひて。安くと。男子と誕生とす。此は後苑小大樹の椋の本あり。天より白幡二流降下て。此椋の梢小から。紫雲たうびき館と覆ふ。鈴の音。天より。白幡赫き。此より七日と経て。白幡天小昇り。紫雲漸小去ぬ。此椋の大樹星霜を經て。風は傾き。終小倒るとも。異香常小薫し。奇瑞絶るとも。人これと崇りて。佛殿と建て。誕生寺と号し。御影堂と造りて。念佛怠るとも。云



昔應神天皇御誕生の時ハ八流の幡より下る其故ハ八幡大菩薩と号は是
 本朝ハ八正道の弘まり也。八正道とは正見正思惟正語正業正命正
 精進正念正定ホるなり。定ハ上人誕生の時一と二流の幡より下る。後年ハ
 佛教と難行道易行道と二に分たす。前表ハ二と云々。正源明義抄の
 又一書云く彼時國の先祖ハ仁明天皇の後胤西三條右大臣の末孫式部太
 郎源の年陽明門カテ藏人兼高と殺と。其科カテ美作國ニ流る。此ハ當
 國久米の押領使神戶大夫漆間の元國カ娘と契りて男子と生ヤル。元國男子
 名ト盛行の子重復重トの子國弘。其子時國ナリト云。前説ハ大同
 上人幼名ト勢至丸ト号ト。或ハ三徳ト名付ケト。二歳カテ秋七月十日曾善導大師迂
 化の日ハ當つて南無三寶ト云々。此ハ縷襪の中より竹馬ハ鞭と奉りて
 更ハ泣號りて云々。恰成長の者の如くして頗る性質聰明。やもそれハ西の壁ハ向

二

ひて黙然としておろし手ヲ習あり。天台大師の幼き時の行狀ハ遠く比叡と云々。程宗翠帳
 紅閨の中ハ貴ミ松風羅月のりハ仰ぐ。桃李万歳の春とひつてハ萬花と折て
 膝の上ハ戯ミ秋帳千年の窓のまはハ明月と詠じて夜と明ハなす。かくて
 勢至丸七歳カテ小方の遊びと云々。常の稚兒ハ遙勝ト。それハ外の遊
 戯悉く他超カテ父の鐘愛一カテハ此ハ當稻岡莊の預所。明
 石源内武者定明ト云。白河院の北面伯耆推守源長明ハ嫡男あり。其身ハ堀河
 院の瀧口の武者なり。然るハ漆間の時國ハ聊カ先祖と慢るの心ありて定明ハ
 從カテ對面セリ。定明深ク之と恨ミ終ハ保元七年春三月十八日の夜
 定明五十人カテの王卒と從ヘ時國の館ハ討入リ。折リ今ハ勇士ハ皆他ハ
 行ハ御カテ。以下の雜人ハ逃去ク影ミ見エズ。時國ハ起アヒテ小
 袖の端折太刀カテ對敵ト散々ハ戦ヒリ。敵ハ八人此方ハ一人。樊噲ハ猛
 勇ト叫ビ難ク覺テ。然るモ王莽ハ術ト云々。祿山ハ威ト震戦ヒ。前ハ

進一三人と。忽ち斬伏たり。此ありて由小避易し。榮し後小退きたり。時國も
 數ヶ所の疵と蒙りて。殆危うく見えたり。此上死勢至丸九歳をうし。母諸
 とも小管望の中小匿きて。手馴し小子となりて父の敵と移し。其夜の大將
 武士と射るや。小過す眉間小中。小事なれども痛手なり。其病ありて計策
 の露れんとて。即時おこし引退く。是小依て後兵中も共後引く。勢
 勢至丸母小對ひ敵のや引ぬと覺へ。惟父の安否と伺ひ奉らんと。丹小蒐入尋れ。
 豈村人や父敵五六人と討たりて。敵の上小伏たり。然れども事なれば。苦
 き息の下り。今一回汝と見まほし。思ふ心と命と。今まで存命ありつと。涙
 たり。小語るや。勢至丸へ涙おられ。今夜不意に討入し。敵を見知りて候
 よ。時國大さおどろけ。我も聡とあかき。敵を汝何れとあかき。勢至丸と
 て曰。證し手と肩せ。惟やう。是白河院の北面伯耆權守長明子。明石の源内武者
 定明とて。候や。時國聞き。儲と黙頭か。汝が行状。是より候も。今も一世小

存命て有き。成長の後と見んよと。露の命の消えんと。殘れやと。涙おり。うに
 くらり。い集り。未ゆる。後類春属。とも小杖と絞る。程小勢至丸親の敵
 討ふと。勢い極く出たり。時國とんと。汝親の敵とありて。定明等と
 討ふ。血と洗し。理。本の血と落ると。今の血又添へ。時國が定明小
 討ふ。是過去の因縁なり。彼と親の敵とて。討ば。汝身小来ん。あや
 一定たり。されば。生或窮たり。輪回たゆと。有べ。定明と討んと思ふ
 とも。有べ。と論し。勢至丸。小管小涙おられ。此小時
 國の舎弟小奈良本。の金吾時貞とあり。有て。斯と聞より。馳来り。此形勢小
 齒と。勢至丸小對ひて。諫めて。云。此場。及ひ何う。て敵と討てあり
 つ。と。嗔き。あ。た。面色小。勢至丸。答て云。多門天の吠尸羅城。八對威。手
 无。育。城。たり。も。父の敵。より。たり。と。乘ら。討ひ。候。父の制止。重
 り。バ。力。たり。候。と。又と。涙。お。られ。なり。時貞。ハ。立。上。り。汝。未。り。

ぞ我は是より打立し。二百余騎の兵士と相具し明石を館小押しせは、関
 とらんと拳たうら然もふ何の音もく。南の庭より煙たらのり物おもせど
 見をく。其辺のそのふ事の一と尋れ、明石の今夜頼死せしをひて、只今茶
 毘せし候とて、皆々愁ふちとらうと聞ひ時貞即時小舟入り見せしを
 棺の火と赤し廻るる子とて薪とてこのけ棺を破りて死人と見せしを
 間射られし矢疵あり。諸は此一矢を明石に死せし者なりとて首とら
 て馳らう。勢至丸は是とりせし勢至丸とて父不見せて云く是ど先刺し子
 と射らう。定明が首とて候とのなまへ時国これと見せして

後世をくあらはしむる疾山の山人とてこれ先づらふり

斯詠は又云く汝は觀音菩薩より申受る一子うれは必も法師と成
 て。佛教お飯し我々の菩提となすの自ら後世とて求めふし遺言しつ西
 向い合掌し佛と念し保延七年三月十九日四十三才とて朝の露と消ぬらう

妻室勢至丸が歎き壁人小品を。諸斯て有るふ有るは菩提寺の學頭觀
 覺得業を招請し引導師とて暮山の野辺を送り。東岱の煙とくしとんぬ
 七日々の念佛誦經急とて歎きの中お光陰はけり。一百日をもたつめとて
 五輪塔婆とて佛事斜し哀らう。事どもなり死

一書云勢至丸小舟とて是と射らふ定明が目の間ふえふ。此麻隠
 ちて支頭あり時國一族怒と報んと必定うと定明逐電してをく
 當庄小舟と夫より勢至丸と小矢見と名け見聞の人々感せぬとてをく
 期て定明逐電の後隠居の心静めて作し罪と悔後世の苦と悲と念佛
 急とて往生の望と遂く其子孫も上人の流れと受浄土の一行と旨と
 せり。小兒凡人ふあはれ。豈怨敵と恨む心あらんや定明疵と蒙らあらうて
 跡とくし往生とてげ。子孫とて浄土門ふ入る。是知識のたくとをく
 凡夫敢とあはれとあはれとあはれと

三

勢至丸ハ父時國の遺言ハ必アヒと報をせられ怨をうつて怨を報く。怨を報くの時ハ
 息ハ唯々々ハ極樂ハ生じるとして祈りて以て自他の利益と圖るべしと有る
 深く菩提心と發しぬゆる。其年の冬彼菩提寺の院主觀覺得業勢至丸
 と弟子ともんと望まれり。素より父の遺言あり。母子とも固辭しとて得業ハ伴
 いて菩提寺ハ登りて學文と得業を以て佛經と授り。一度聞なれば則覺るの
 るべ。能其義理と解。一字教も十十字と知。一義と教も多義ハ通じ。更ハ
 忘るるもく。學文の性も流る水も速らう凡九歳より十三歳まで
 菩提寺ハ住して習學も和漢の文書もわがす。諸の經論章疏ハ於てハ
 通を得たり。

一説ハ云く菩提寺の院主觀覺得業より原延曆寺の學徒より。大業の
 望の達せると恨みて南都ハ移り法相と學して所存と遂く。勢至丸の母奈氏
 弟をなれば上人の少留るる。時國の遺言の事ありれば弟子とせられ之と

觀覺得業ハはく勢至丸の行狀と鑑して。凡ハ人ハ亦ハ覺る。徒ハ草
 澤の塵ハ雜ん事と惜む。勢至丸ハ對して云く汝ハ亦ハ學文の器量なり。田舎
 小して其深理と究んを覺束か。それゆへに光明通ともあり。所
 詮本山ハのほりて學文ありと。勢至丸とて。師の命ハ順ひて本山ハ
 登りて勤學と候べしと領掌あり。得業ハ勢至丸と伴ひて里より。母
 母ハ告て暇を乞ひて本山ハのほんと稍て母ハの宿所より。如此の條と
 語られり。母のほりて本山ハハ何地ハも。得業云愚僧の本山ハ南都ハ侍
 せども聊據らさ故ち。山門ハ他山ハれども。知己の僧徒住するれば。彼
 方ハ登山マらんと思つて母のほりて。夫ハあつて。聞及ハ比叡山ハ是より
 行程十日より遠方ハ。これ我子と見まし思ふ。容易ハ叶はず。又
 使の者と遣とも。往還も日數と經く。生死のほりても期が。得業のちを
 わ程の支と學をせわす。何の不足有ら。思ひまはる事ハも歎きつ。

菩提寺靈木銀杏之圖

不詳一在...の
圍史余高三千間余東西
二十八間余南北二千七間余
あつとも山岳の...
菩提寺の美作國勝
田郡高圓村にあり
岩間山と号し或
奈波山と号する
隣國に雙木あり
高山なる本尊
觀世音立像丈
八尺後小角の開
基ありて鑑真和尚
再興と云々
源空上人幼雅の時
叔父觀覺得業
小後ひ勤學あり
旧跡あり世に
生寺の真院と云



當寺に銀杏の木
大垂樹あり傳
源空上人當山に勤
學の時銀杏の
木を伐り榎木と
し之を師の房の
是とすし其出家
なる身なりし木
なりとも生たるものと
根切らんを...
教へし源空深く
此事と恐るし榎木と
元の庭上よりて
て修行末真の出家と
るふ二と此木より枝系
盛んとしひる...
今に至りて本木の十四の
の如き痛まかりて其數百有
大師の高徳眼前より...
仰ぐ尊と



得業もこれと推量す。是非の言もろろり。勢至丸の諫て云く受ふれば人身と受
逢ふれば佛法の教あり。眼前の無常と見て。夢の中の栄華と厭ふを。就中
父の遺言。耳の底ふ止りて。心の中ふ忘まは。く比叡山ふ登りて。速ふ一葉と字
べ。但し母世ふ在ん程。朝夕の禮といふ。孝行と尽さんと。思ふも有為と厭
無為ふ入る。真實の報恩とて。一旦の別とて。永き日の歎を。残し
わすれられと。呉々も慰めり。母とて。道理ふと。袖ふあする
悲このあひび。見えり。稍あて。偕つらの項工。問の。明日
と。母は。是は。日の吉凶。供の者。も。櫛へ
出立。自ら。在家。候。公方へ。出仕。候
も。尤日の善悪。も。候事。此度の登山。隨分。道世の志
ふ。候。供の者。と。山まで。送。二三人。ふ。過。の事。ハ。ハ
を。吉日。候。と言。母。今。為。方。終。夜。衣。装。と。裁。縫

朝あつれば。涙。勢至丸の髪と手げ。結び。衣装と著せ。て。用意
も。調。馬。乗。従者三人。と。添。得業。も。同宿の僧。一人。後。僧
一人。贈文。時。久安三年の春。勢至丸十五歳なり。
一説。久安三年の春。二月十三日。云。正源明義抄。天養二年三月。昔。義作
と。靈佛。社。参詣。備。学文の宿願。成就。祈。誠。心。か。バ
去程。聊。日。數。同。晦。日。京。著。明。卯。月。一。日。り。兒。出。立。の。日
ん。侍。供。の。者。ホ。ま。り。り。流。石。山。門。ハ。目。取。り。作。今。日。御。髪。と
り。行。水。も。候。り。と。言。兒。も。母。の。今。日。と。止。り。せ。わ。ふ
ふ。停。ま。で。京。還。留。せん。行。水。ハ。何。の。詮。も。ん。と。出。ら。れ。ハ
供。の。者。ホ。ま。り。り。登。り。り。と。云。余。有。た。ハ。上。人
十三歳の時。み
程。勢至丸。日。と。重。り。て。京。下。り。即。時。山。下。り。下。マ。松。の。下。り。そ
貴族の御出興。不。値。奉。る。見。物。の。人。お。と。九。條。閨。白。忠。通。公。と。申。す。急。馬。より

下て木蔭ふまゝり潜びたり。殿下車と駐り。使者とて問給ふ。見是相。何国より何方へ往くを勢至丸答て云く。我は美作國のものなり。知く父を喪ひ。山門を登りて出家。父母の菩提を弔ひ。普く一切を利せんことを望み候ふ。殿下重りて山門の本房へ入れ。答て云西塔の北谷持室房の阿闍梨源光の許へ登り候ふと公宣く。勤めて勞を怠りぬを折あり。又再會すと約してこゝへ往くをいふれ。程勢至丸馬に乗登りぬと云く。或説云忠通公館に候りぬをいふ。卿子兼實公に語り。今日不思議の小童。小値に眼黄ありて光あり。頭小圓光の形ありて凡人より年十五歳西塔の源光と頼て登山と云成。後定りて高德の知識とらん。口惜き哉。忠通年己老る。此人の化導小逢へ。死後不於て汝必此人の化導に依て出離すと。態に語る。故に兼實公別て工人に歸依。渴仰し。ナヤ。又正源明義抄に。此上人より。月輪殿下兼實公

少を勢至丸と御車の前より召れ。其故由と問せぬ。相とて学文小心といれ大碩学とて。兼實公出家の師匠と成り。御約束りて殿下へ御通り。去程小勢至丸馬小打乗山より下りて。供の者も小言され。汝も言ふ。つと京に滞留せ。争うの人の御目あか。既小殿下の御出家の師匠とて。一天の君の御師範とらん。兼實公の内。天暗学文の門出。とて。勢至丸とて登給ひ。何と。是を知らず。斯く。敵山より登り。持室房に著て兼實公と云。源光取次の詞小順ひ。立出て對面。何国より来りぬと尋ふ。同宿の僧の曰。是は美作國南都の觀覺得業。今當國菩提寺に住山候。御状の候。贈文と捧げり。源光披。見。玉章久通。互ふ心。萬里と隔た。知。積憂の至。依。拙状と捧。貴殿へ。抑正身の大聖文殊聖客一鉢。んと贈。頭主。三月廿日。進上源光阿闍梨御房。沙門三會已講觀學得業と書り。三月廿日。進上源光阿闍梨御房。沙門三會已講觀學得業と書り。

文と見れば大聖文珠とあり。見と見れば日思とあり。何とも異なり相うれば。つら
さる兒の器量と感ども。斯の書なるものなり。見と止りて先試ふ止觀の要
義と問う字。敢と滞る處あり。源光嘆じて曰此兒の神器。我指南とて
物ゆめと。功德院の皇圓阿闍梨小附なり。

一書ありて源光試ふ先四教義と授ふ。籤とて不審とあり。疑ふ所
も天台の古き論なり。誠凡人ふあはれども申ありたり。此兒の智慧
勝るく名譽ありたり。源光これ愚鈍の者なり。智者ふつけて天台の
古き義とききしやめんとき。此兒と相具して。功德院の肥後の阿闍梨皇
圓の許小伴とせられり。此皇圓は粟田の関白四代の後胤三河権守重兼の
嫡男ふして少納言資隆の兄なり。隆寛律師の伯父光学法橋の弟子とありて
當時の知識一山小秀とる人也。阿闍梨勢至丸の智慧深き事と聞くと。かど
ろとて云。去る夜の夢小満月菴ふ入と見る。今此兒ふ値べき告ありたり

とば悦び申されり。又正源明義抄に上人十三歳の四月朔日。持室房源
光阿闍梨の許小至りて有。斯て今夜其兒の器量と試んとて。四方八面の物語
をこつ。夜ふ入と後の夢ひりる童子の田舎とて何とて問ふ。勢至丸答て
曰く。田舎のともを修む。ぼくく差る物と誦せば候と。源光これあつて内典
外典の物語と委く問う。凡御尋の分ハ誦とて候と答たまふ。諸ハ大略
残りばよまれり。俱舎論いふと問ふ。未ハ誦せば答たまふ。源光さる夏の初
ふ。六百行の頌と教く申さんそ。本書といき一遍誦してきうせ。是と今夜の中
おび。朝源光ふ聞せり。勢至丸うけり候と領掌しり。やどく
睡眠しり。そと夜もあひのれ。源光兒とてけく誦きうせ参らせ
俱舎の頌いひられり。やと有れば兒はさうく業どる故。源光はこれ
ばとて。ゆづ一過と聞やりのとられ。いりる文珠と習びて叶ふ

況や猶て寢ふれば。中々多くの頌ハ覺る。有るべきも思ひあ
 處ふ。兒稍あつて云く。女々覺る。存候ふ。本書と云て御覽候ふ
 誦して聞かせ申さん。源光さん。本書と云て御覽候ふ。兒も共
 小本書と見ると。わりのひび。さいらう。本書の方ハ見ひもや。だ
 たら諸一切衆生。冥滅拔衆生。出生死涅槃。敬礼如是如理師對。實
 藏論我當説と云り。終の超勝五百應心待迦葉。微羅釋三藏。小至る
 まで。一字も脱ぐ。六百行と空ふ。誦せしむ。源光これと聞ひ
 候。本々とも。六百行と空ふ。容易い。大聖文珠の化身之
 天暗我山の本願大師の再誕。胸うらさ。不思義の
 あたり。兒とほく見ひ。頂平み。思。眼。黄。光。是更
 人間の種。有無の言も出づ。昨日送。未
 僧俗己下。促。源光返事と認め。其状の文。

貴札の趣。明朝の霧を拂ひ。夫貴方。向いて拜見。候。子ぬ
 抑大聖薩埵の御登寺。一山の法燈。叡岳の昌栄。貧道淺
 智。愚案老耄。も。明頭多輩。習字本望。頓首謹
 言。大阿闍梨源光請文。介後源光兒。對ひて。源光。是
 一文不知の者。然。禪房。无智の身。奉
 奉。事。後悔。勢至九の。仰ハ
 御事。候。唯不便の仰。蒙。候。年月と送。至
 既。十五歳。成。明義抄
 大意
 諸。勢至九。西塔の北谷功德院の皇圓阿闍梨。附。勤学。同年の十一月
 緑の髪。衣と著。戒壇院。大乘戒と受法名。善信圓明。と
 号。既。出家の本意。吾年頃の願望。満足。大。喜
 介後時々師の阿闍梨。僧衆の文。跡。深山林藪。隱迹

源空嵯峨の
釋迦堂
參籠の圖



上人廿四のし。
嵯峨の清涼寺
あつちのこれハ
法と求と一丈
とこのつわん為
るり。その此寺の
本尊ハ西天の
雲と出東夏の
霞にまけて三國
子傳りたる天
像とれぬるるに
わもろふ志と
こもひひらるる
ことつりこそ覺え
まらるる

源空



せんとして願ひたり。皇圓すいげんは許ゆるさず。御遍ごへんの吾山の法燈ほつとう一山の明玉めいぎよと人々ひとびとよりとび
あふ。何なんぞ今日こんにち此項このかたの道世だうせいと思おもひ。たゞ隱遁いんとんの志こころあり。先宗せんそう教くわうと練達れんたつ
して後のち其本意そのほんいとてささぐ。諫ことごとふ圓明えんめい也。實じつもこれ隱遁いんとんと稱なづふとて
あぐく名利なうりの望のぞみとやめて。静しづか佛法ぶつぽふと修学しゆがくせん為なり。此仰實このあやまふあつらひて
三箇年さんげん留学りゆうがくしり。圓明えんめいの智慧ちゑ深ふかきとあまねく其聞そのきこえたく。四教しけう五時ごじの
廢立はいりつがごとかり。三觀さんくわん一心いしんの妙理めうり玉ぎよと磨とぐ。立たち處ところの義勢ぎせいまことふ師しの教くわうふ超こ
たり。皇圓すいげんより感かんして。學文がくぶんとほら大業たいげふとてけて。天台てんたいの棟梁とうりやうとらうりて
平生へいせいとて言ことされ。かごと。更さらふ兼引かねひきりらば尚なほこれ名利なうりの學文がくぶんとていひ。
只ひたす管くだふ隱遁いんとんせんとして乞こむ。皇圓すいげんは志こころのぞり難がたきとまう。あまあまば暇ひまと奉たてま
らん。道世だうせいも。但ただ日本にっぽん中に閑居かんきよとなづめ。も西塔さいたふ黒谷くろやの慈眼じがん房ぼう叡空えいくうの御
房ぼうハま。夫それ参まゐりて。心こころ許ゆるり。圓明えんめいハ殆たいていど喜よろこび。稍やがて時ときとも移うつ
る。師しもこれも禮れいとて。同宿どうしゆくの僧衆そうじゆうふ暇ひまとて。黒谷くろやふかりし。なま。時ときハ

六

久安きうあん六年九月十二日。生年十八歳さいなり。西塔さいたふ黒谷くろやの叡空えいくうの許ゆるり。給たまふ
明義めいぎ抄せうハ久安きうあん六年八月廿六日。左ひだりの手てハ茶筒ちやんと持もつ。右みぎの手てハ茶筌ちやせんと捧た
て。既すでハ道世だうせいハ出でた。又また或書あるいよハ皇圓すいげん道世だうせいとて。手てハ。名利なうりの學文がくぶん
とて。名利なうりの學文がくぶんとて。いひ。勿なほハ師し也なりの所ところと出でたり。叡空えいくうの御ご房ぼうハ
抑おさへ。空くう上人じゆんじんと申まをす。大宮おほみや攝政せつせい殿どのの御ご子こハ。良忍りやうにん工人ごじんの御ご弟子だうし之の京極きやうごく大政だいせい大
臣おほみ高衡かうかう公こうの御ご孫まごハ。あつらひて。中御門なかつりかど中納言なかつりかど家成けいせい卿きやう。又また小野宮おのみや殿どのハ。伯父おぢ公こうなり
とて。圓明えんめい十八歳さいなり。此叡空このえいくうの御ご房ぼうハ。参まゐりて。折をり。止觀しくわんの談議だんぎの最中さいちゆうあり
老若らうじやく五六十人ごふじゅうにん集あつり。圓明えんめいの来きり。見みて申まをす。是こゝハ未ま若じやく僧そう
也。當山たうざん無双むさうの學匠がくじやうの名なと得えたり。圓明えんめい公こうハ候こうふ。何なんぞ法門ほふもんと申まをす。参まゐりて
候こうと。圓明えんめいハ御ご前まへの椽えんハ。良りやうとて侍まをり。叡空えいくう問とて。汝なんぢハ何なんぞ。未ま
ぞと。圓明えんめい答こたへて。云いは。定さだめて。名字なうりとて。聞きく。も候こうらん。持寶房ちほうぼう阿闍梨あせり
源光げんくわうの弟子だうし圓明えんめいと申まをす。者ものハ。候こうふ。道世だうせいの志こころハ。候こうふ。参まゐりて。参まゐりて。参まゐりて。

と申上ぐ。般若空重て同く抑通せしむ。過去の心は通せしめて来りて現在の心が
 通せしむ。未来の心が通せしむ。過去の心が来りしむ。過去の心の去てあし。
 現在の心が通せしむ。言へ現在の心は不住なり。未来の心が来りしむ。未来の心は未
 至しむ。佛心即魔界。魔界即佛心。一心為一念。遍有法界也。云々。何れの
 心を通せしむ。来りしむ。圓明答て言く。過去現在未來の心は通せしむ。無
 始已来今世流當来之所在煩惱流轉流浪。面々者衆生有苦。頭罪心と云。
 此文の心は来りしむ。参り候て言く。時ふ般若空波と云。言ひしむ。三塔お
 学庫多し。般若空可様小問たり。斯のてく答て言く。後覚。御房
 ハの流轉滅滅の法門は。落居せしむ。其名の何と名のり。と仰
 り。善信圓明と申候と答へ。御房ハ實法然具足の人なり。今日
 法然房と字し。實名と師匠の源光の源の字と般若空の字と。源空と
 名のり。と仰り。今日より改名して法然房源空と。名のり。ひり。程ふ般若

空ハ密教と稟受して圓頓戒と傳へ。凡一切の經論内外の典籍博く練普
 究めしむ。保元二年の春源空年廿四歳。或云保元二年春三月廿四歳。思惟しむ。六
 教法。時ふ背の何と云。人々利益せんと。嵯峨の釋迦堂。一七日。参り籠
 し。祈念しむ。懇を。保元二年三月十二日南都の興福寺。蔵俊僧都
 の許りて法相の法門と云。六經十部の論眼と云。四分三性の法門。小玉
 を磨きて真儀を究りしむ。平治元年。中河の上人。奉て真言の
 秘法と傳授し。四曼三密の法門と云。永曆元年。初秋。招提寺
 の鑑真和尚。傳戒と字。三聚十重十无盡と云。應保元年。四月。小
 仁和寺の寛雅法印。三論と諳し。長觀二年。初冬。小
 慶雅法橋。不謂く。華嚴宗と字。したす。鑑真寛雅慶雅の三師。も小
 其超絶と嘆。或は供物と贈。或は章疏と寄附。と云。
 一時源空華嚴經と披き見たり。怪き青蛇。来りて。机の上。蟠る。見たり。弟子達

大驚驚。其夜源空の夢小怪と女来りて告く曰我は是天竺の無雙池をひ善女
 龍王なり。上人の佛法守護の事参り所なり。必と怖れをせしめし示し終りてなまら
 消幻の如く夢さる事なり。又法華三昧と修しつゝ正身の普賢白象小
 乘して道場小現也。又暗夜小書とてつゝ光明と照して白昼の如し。又
 真言觀門の時の道場小入と。阿字觀と修す。五相成身の觀行と現し大日
 如来は是周遍法界の理自性清淨の本躰なり。非色非心の理かり小三身滿德
 の形と示し。無言無説の佛。一實真如の旨と説く斯の如く觀念したるは
 五輪種子の觀よりして九相の一身は無常の成り所と觀じ。益して遁世の志
 小進みかたき也。或云永元元年四月上旬近衛坂の西小州苑と結び独学の
 志ありて隱居ありて是今の新黒谷の地なり
 上人既小聖道諸宗の教門不明なりし。法相三論の碩徳固々小其義解を感じ。
 天台華嚴の明通一々小彼宏才と稱びたれども尚出離の道小煩ひて身心安
 順次解脫の要路とせんたら。寢食と廢くられと業どたより也。小諸の

論藏三國相傳の聖教和漢人師の所釋一々小高覽ありしが偶惠心僧都の
 往生要集と讀みして是は源信已證の法門なりと心とて見ゆ程小。らて
 往生の業へ念佛と本とすることを知りし。余後黒谷の報恩藏小入と周く一切經と
 見ゆと五遍善導の五部九卷の疏曇鸞道綽の章疏亦と未く聞ゆ小。身
 一遍小一代の經論と聖道門淨土門と二分すべきことと悟たまひ。第二遍小淨土
 門小於て專雜の二小行ありと察しゆひ。第三遍小大小乘の肝要小。彌陀の
 本願名号の不思議とてと御覽あり。都合三遍詮る。知觀經の疏四卷ありと
 一心專念彌陀名号。行住坐卧不問時節。久近念々不捨者。是名正定之業。
 順彼佛願故とつ。此文の下より此度の出離生死頓證佛果の道。彌陀の名
 号小限まりと治定しゆひ。習学廿三年。獨学十二年の学業とてとて。安元
 元年乙未生年四十三歳ありて終小淨土門小入。末代悪世の衆生極惡最下の凡
 夫の得道へ彌陀の名号小かきとて。堅固の信心小住し。専ら念佛と修しつゝ

源空既リんそく自行じぎやう多おほくう。推おく他た及およびあんと思おもへり。如何いかあんと危あや踏た思おもし召よれり。其その夜よの夢ゆめ小こ紫むら雲うん一いつ國こく小こ満まんきて无む量りやうの光ひかりと放はなち。其その光ひかり化くわして百ひやく審しん色しきの鳥とりとあり。中ちゆう小こ高かう僧そうありて腰こしより下したの金きん色しき身みと現あらわたり。源空りんそく問とて曰いはく誰たれ人ひと哉やと吾われは是これ善ぜん導どう。汝なんぢ將まさに念ねん佛ぶつと弘こう通つうせん。故ゆに來きつて證しやう明めいもつらうと覺さあて大おほく喜よろこびのひ是これより源空りんそくの志し決けつして一日いつにち叡えい空くう往かう生じやう要やう集じふと講かうの工こう觀くわん佛ぶつ三さん昧まいと勝かちたり。念ねん佛ぶつと考かうれり。源空りんそく坐ざり有ありて是これを難なんじらふ。叡空えいこくも亦また是これを志して不ふ兵へいをう。後のちみまこれとおのろふ。其その由よしありて悟さとりて源空りんそくより代だい講かうせしむ。聞きて益えき々々これと敬かうひの叡空えいこく臨りん終しゆうふ。本ほん尊そん聖せい教かうの類るい盡じんく。これと源空りんそく子こ讓じやうり。安あん元げん年ねんの春はる年ねん四し十三じふさんありて黒くろ谷たにと出でて吉きち水みづ小こ移うつ住ぢゆうし。淨じやう土どの門かどと闡けん揚やうし。不ふ小こ眞しん宗そうと弘こうえり。一いつ國こくの人ひと風ふう小こ靡みく。其その化くわ導どうも高かう倉そうの帝てい禁きん中ちゆう小こまらり。菩ぼ薩さつ戒かいと授じゆり。后こう宮きゆう妃ひ女によ群ぐん臣しん多おほく戒かいと受うり。あり。

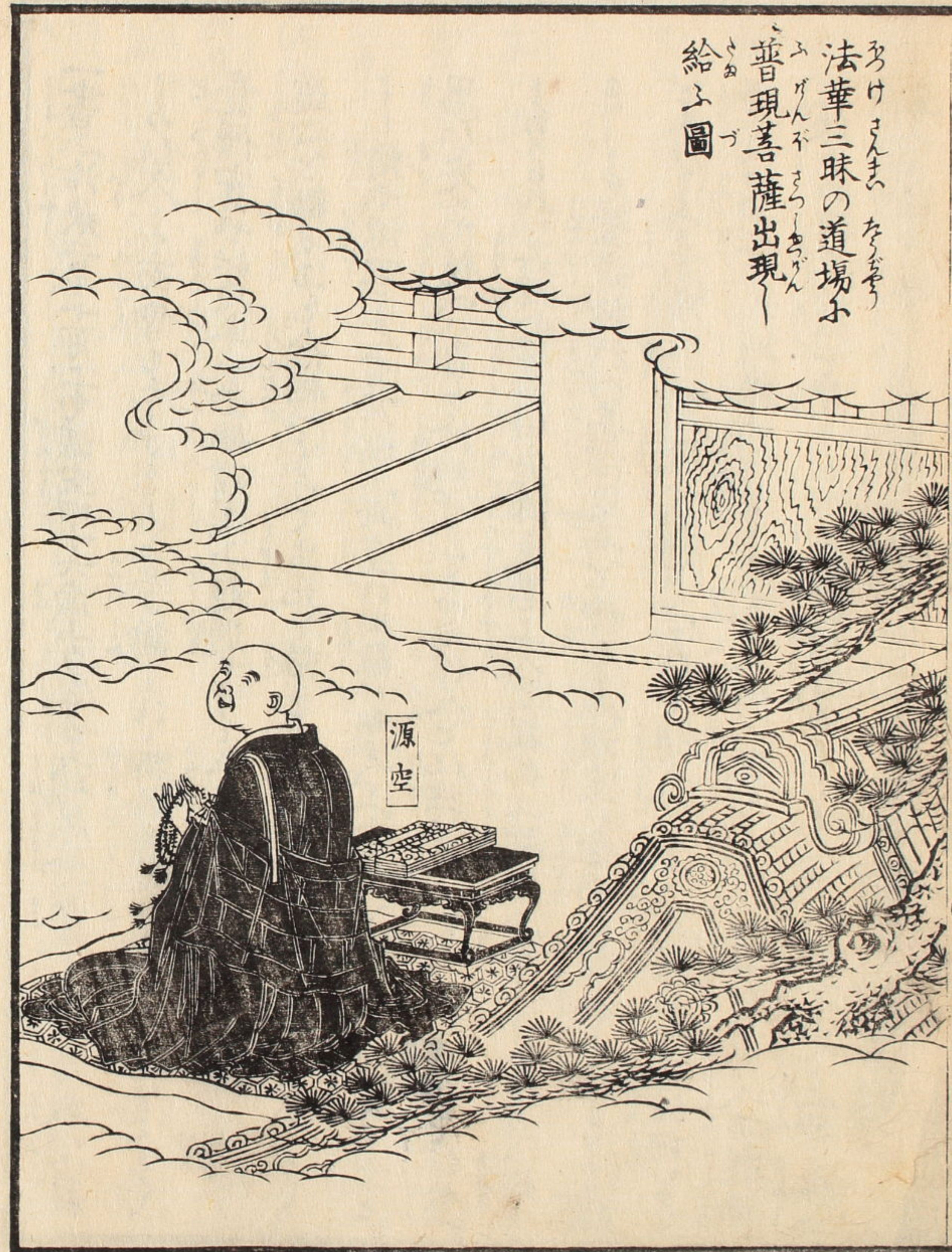
一書いっしょ小治せうぢ承じやう二年にねん十月じふげつ上旬じやうしん源空りんそく四十六しじふろく歳さいあり。時とき黒谷くろたに參まゐり。慈じ眼がん房ぼう叡空えいこく謁えつし。久ひさく面めん會かいもあがり。互たがひに謝しやうし。御ご物ぶつ語ごの序しよ小叡空えいこくのたまふ。貴き僧そう實じつや此こゝ近きん年ねんの念ねん佛ぶつ諸しよ宗そう小超ちやう過かせり。自みづから念ねん佛ぶつ小皈きし。人ひと了りやう道だう心しんと勸くわんり。念ねん佛ぶつよりて生じやう死しと離りは。是これ小過かる法ほふなり。申まをさる。雨あめや源空りんそくよりて左ひだり儀ぎふ。此こゝ度たの出い離りは。念ねん佛ぶつよりて次つぎ定ぢやうの業ごふと思おもひ定ぢやうりて候まち。自みづから修しゆ行ぎやうし。他た人ひとと化くわ益えきなり。亦また名な念ねん佛ぶつを仕し儀ぎとあり。其その時とき叡空えいこくの曰いはく先せん師し良りやう忍にん上人じやうじんと。觀くわん佛ぶつ三さん昧まい殊じゆ小勝かちたり。仰あやせ。是これ聖せい道だう修しゆ行ぎやうの甚しん深しんの容ようと仰あやせ。源空りんそくの念ねん佛ぶつの諸しよ教かう小勝かちたり。様やうとまら。互たがひに廣くわう学がくして數すう文ぶん釋しやくして問もん答たあり。源空りんそくの曰いはく機き法ほふ相さう得とく道だう決定けつぢやうなり。時とき機き小相さう背はいり。凡なん夫ふ听しやう入にゅう難なんなり。造ぞう惡あくの愚ぐ人にん小觀くわん佛ぶつ三さん昧まいの深しん理りの法ほふと望ぼうさん。弥み陀たの願げん力りきあり。出い離り不定ふぢやうぢやうと存ぞん候まち。叡空えいこくの云いく凡なん夫ふと。聖せい人にんと云いひ。一いつ向かう小乘せうじやうなり。生じやう死しと離りべし。



法華三昧の道場

三十一

あけえんまを
法華三昧の道場
ふげん不まらあかん
普現菩薩出現
給ふ圖



源空

三國七高僧傳圖卷四

三十一

一切善惡都莫思量。諸法と一佛乘と開會。何者。漏んやとて。大いふ笑ひ。源空言く。是は事新く。覺え候ふ。八宗九宗の法門。いづれも勝劣あり。候ふ。教のどく。修て。其證とあり。とん。掌と返さん。如く。其段素より不審。候ふ。機法相應して。凡惑。得道せん。方。叶。候や。文證とて。言上。候ふ。腹立つ。汝。誰。あひて。習所。の法門も。流石。源空。智分。物。大海の如く。汝。学。道。あり。源空。が下。ぞし。我。向。いて。斯。と。言。は。責。源空。迷惑。る。面。色。て。是。は。法門。て。候。て。一向。諍論。て。候。あ。れ。た。判。者。た。候。落。居。そ。く。候。と。の。と。言。ひ。れ。ば。源空。腹。小。居。て。念佛。勝。た。汝。言。言。せ。其。心。ま。つ。ま。と。御。傍。ら。枕。と。て。投。つ。け。ぬ。此。に。御。前。も。同。侶。達。申。され。り。斯。と。仰。せ。候。ふ。先。ま。せ。り。と。言。ひ。れ。ば。源空。力。を。支。り。て。善。導。和。尚。と。上。来。雖。説。定。散。西。門。之。益。望。佛。本。願。意。在。衆。生。一。向。專。稱。

彌陀佛名と釋。稱名勝。明。聖教。と。御。らん。候。ら。ま。と。言。ふ。源空。と。く。腹。と。て。醫。王。山。王。も。御。照。覧。あ。れ。自。今。已。後。師。弟。の。義。有。べ。く。と。掾。まで。追。て。出。ぬ。足。駄。と。て。追。さ。ぬ。打。な。す。龍。の。耳。の。上。に。あ。り。紅。ふ。血。か。り。て。遊。ひ。り。時。小。同。宿。の。僧。等。大。方。ら。ら。に。思。ひ。あ。ひ。る。人。ど。勝。れ。と。稽。す。者。れ。と。卑。む。し。め。く。此。程。余。う。小。学。道。の。有。つ。ふ。最。き。と。其。上。工。人。御。誓。状。ち。て。御。打。擲。あ。る。人。の。容。易。免。し。や。と。有。ま。と。そ。み。ま。密。語。あ。ひ。る。同。三。年。二。月。源空。病。お。し。り。源空。傳。聞。り。て。登。山。し。り。思。ひ。て。御。居。小。参。り。学。秀。僧。都。と。出。言。ひ。り。御。違。例。の。兼。候。ふ。間。御。老。鉢。の。御。更。し。て。候。へ。い。と。存。一。登。山。は。候。と。言。ふ。学。秀。僧。都。喜。び。て。上。人。此。を。と。仰。せ。あ。り。し。三。百。余。人。の。弟子。の。中。小。法。然。房。誠。の。大。学。道。を。源空。が。怒。ら。と。も。本。意。を。思。す。と。これ。偏。念。は。ら。じ。と。仰。れ。候。も。

登山りりやの哉まらしく忍びて待たる。首尾を討し申さん。傍の間ふ置く。稍く学秀ハ叡空上人の病牀と伺ふ。叡空目とゆき燈のほろのりして。諸各ふ對してのなまや人多しとて。法然房ハ心あるものなり。叡空ハ明日辰の一天臨終まらり。法然房ハ心ももつと仰られ。学秀の言はく。法然房ハ内曲外曲ふ通。学道心者を候はば先達ていせむいよ。聊遺恨ふ存ぞる。師病著ふ卧りて。兼王候ハ登山仕つる余所。あつ兼事ハ候。あれも先頃の御制文ふ恐む。迫房ふ候らんも。知まは候を申あそ。叡空言く。あれ未れ。何莫と言ふらん。あつり色。学秀坐をて稍を。有て出来。折う法然房まらり候と言され。られ。叡空とれ。仰あつて。源空御前小良。叡空お笑ひ。うま。ま。来まらり。去項誓状や。上打擲ふ及び。定て無念ふ。い。い。よも登山ハあつと存ら。只今未臨あつ。脱び入侍る。一期の對面是ぞ。

限らる。御心底の。も吳々御物語ある。書記せん。と。硯紙と。石。し。自筆ふ認り。當坐の人々。今何と書せむ。んと。おひあつ。是ハ。聖教此讓狀ふ。其文小く。讓渡聖教之事。比叡山西塔黑谷の經藏。小置。ところの五千余卷の經論。北白河中山の經藏。小安所の三千余卷の聖教。残るところ。あつ。讓与る也。仍狀如件。

治承三年己亥二月日

叡空判

法然房と書ら。此時

日項源空と猜謗。同侶見達ふ。ま。此あつ。あ。皆一統。口。閉智者と智者との論談子細あり。と。密語あ。偏執と失ひ。中。も淨憲法印ハ師の杖の弟子。あ。ハ法門の印形。て。面目。感。給へ。叡空御急病と披露あり。諸方。檀越の後弟。未集。凡。四五百人もあり。諸叡空上人。其夜も明。本尊。威義例の。て。即悟三昧不住。終ふ。満座の諸人。涕泣。阿難尊者の恒河。

辺りて四十余年の化義ありて三昧定入りて如し。時の哀傷師弟の余波共
 盡し事あり斯て有べき支なり。御棺とて入棺奉る。兩三日を経て
 既茶毗奉らん時。叡空御棺の中より。此棺の蓋とせしけと仰出さる各
 驚き騒ぎ周章て。空信学秀御棺と開れば。棺の中より自ら起り。師手
 と引きて出さる。源空少し坐具との。三禮あり。源空本地身皈命大
 勢至化度衆生故於娑婆出現と三度とて。御座あり。諸人少し涙と
 言ひり。法然房と炎魔王宮。御沙汰あり。今こそ存ぞん。我未だ定入
 せし有し所。燧魔大王来現して。大日本國源空の本地。叡空お拜せ
 らんと誦て云く。源空本地身大勢至菩薩衆生。為利益度々出現故と誦
 して去り。斯る薩埵の化身と罵り打擲し。罪障と懺悔せん。為又
 獲生とて。硯と紙と有り。別紙ありて。四明天台の沙門叡空。進上法然上人
 と書る。源空小奉

ぼり。偕叡空源空少し十念相續して往生とげし。先ハ三昧相
 兼して。即悟三昧不住して終り。今度ハ念佛三昧。治定して禪定
 入り。御息絶せむ。觀佛念佛の兩益あり。二度往生と遂を
 わり。或云上人一向專念の身とて。終り叡山と出。西山の
 瀧の念佛の行とて。導日々盛ん。念佛の行とて。乃雲霞の
 又一説。小善導大師源空の夢。現り。治承四年庚子。源空御年四十八
 四月七日。夜の事あり。尤夢想ハ高山の中。程小源空。見あり。南
 北遠く西小向。峯より三重の滝。落て清水濤々。麓の大河
 漲り流る。其傍小大道の通驛あり。男女多く往來。西の方と見あり。
 地より五丈より上。空小群の紫雲あり。此雲飛來。源空の所。至
 此紫雲の中より。孔雀鸚鵡。百畜の色鳥。出く四方。翔る。其
 眼より光明と放り。十方と照る。又其雲の中より。一人の僧現る。其姿

腰より下ハ金色より上ハ黒漆の衣なり。容顔微妙にして老年六十ゾウ
 ろろが合掌と胸あけて高聲念佛をなす。其念佛の聲は口申す
 化佛をうらふ出現の聲なり。源空曰く是ハ誰人かてきしきと僧答
 て我是大唐念佛興行の祖師善導和尚なり。汝専修念佛と弘ま
 たりと故小来りたり。今高山の頂より是念佛三昧。万行万善の上々
 の頂より表より処なり。三重の滝ハ江河の如し。汝が勸化念佛三昧の法
 水法滅百歳の時まで利益あるべき瑞相なり。百密色鳥眼より光明
 と放ら汝が頂よりそよそよ。六方恒沙の諸佛。汝が護念したまふ謂れなり
 と。十念と授けらひ眉間より光明と放らたまひ。吳香薫じりたりとて
 夢さるる。源空おひろひていは。是正しく我念佛利益の。海内ハ昔
 流布とて瑞相なり。夫よりいひ念佛の信心よりききやとて
 治承四年十月廿八日本三位中將重衡卿。父平相國清盛の命ありて。南

都と攻し。東大寺ハ火罹りて大伽藍忽ち灰燼とる。是ハ仍て後白河法皇
 再興と企め。旧例ハ准四方ハ勸進ヤらん。然るに事容易う。源空と
 其人少くも功成とて。大勸進の聖の評議有らふ。源空其選びハ
 當りといはれ。即右大辨藤原行隆朝臣と勅使して。大勸進職たづね
 宣旨云。南都の佛法滅亡の糸。朕愁歎し思ふところ。上人いづる同心せ。余
 賊徒等七太寺と亡む。余は閣。東大寺ハ先皇の御願なり。
 十六丈の盧舍那佛一時ハ破滅と。御身量震襟とて。置とらう。思ひ
 早く上人鑄仕と加つれ。宣く佛閣と建す。佛像と安置せ。朕が
 喜悅のころ也。先奉加奉る。源空宣下の趣と聞。召。勅答申されり。ハ
 御宣承く仰下と。源空山門の交と遁と。幽小住居とす。ハ
 閑ハ佛道と修。念佛と勤行せん爲り。且ハ年齡ふまり。未て。造営
 と。此期と辨。就中山林籠居の身ハ斯く大勸進最愷と甚く。後

重衡
東大寺
と焼七



治承四年の冬南
都の大衆平家と
重衡
怨む事ありて蜂
起騷動して静らば
是よりして平相國清
盛入道追討使と遣
さんとして十二月廿六日藏人
頭重衡朝臣と大将と
して其勢三万余騎南

都へつこころ同廿八日重衡
三万余騎と二手に分ち
奈良坂般若路より推
よせ時とつゝ衆徒も
用意のとるれば時と合
せて散々小防戦ありて
播磨國住人福井の庄下
司次郎大夫俊方といふもの
重衡朝臣の下知ありて
楯と破て續松酒屋
在家より火とりて折
節風烈く猛火吹覆
東大寺興福寺の佛
閣諸堂諸院一宇
も残らば焼七せりと
源平盛衰記小
見えたり



自余の貴禪房へ仰せ下され修之。固く辞退申され。法皇源空の御
 答と聞召。押て仰下され。弟子等の中。然るべし器量の徒あり。指
 図申され。源空まゝ。若俊乗房重源と申。此職と兼ふべしと存
 候。ありれば。即ち勅使あり。重源と召。頼て参丹仕る。是より。大勸
 進職を補。重源左右。領掌。奉る間。後白河院の御奉加。云
 奉加。佛閣造営。東大寺。佛殿金堂講堂
 戒壇院。来迎堂。鐘樓。經藏。佛閣寺。聖殿寺。鎮守。拜殿。湯屋。大透。櫓。允
 目録斯の。造営の間。防州。私領。造功。匠の大工
 侍従。大納言。種安。補。宣。諸人。助力。奉行。左。少。辨。行。隆。下。知。加
 仍。執。達。如。件。養。和。元。年。壬。午。四。月。日。参。議。彈。正。少。弼。藤。原。朝。臣。泰。定
 俊。乘。房。奉。御。奉。加。の。目。録。奉。行。大。工。一。紙。の。せ。り。重。源。と。れ。と。給。り。て。
 源空の見参。入。奉。加。の。趣。と。見。た。手。ひ。て。仰。り。天。暗。阿。僧。ハ

推者。是。程。の。大。勸。進。と。受。れ。り。と。言。ひ。也。

一書。此。時。の。勅。使。ハ。藏。人。信。國。と。又。重。源。と。澄。源。と。作。り
 俊。乘。房。名。ハ。重。源。姓。ハ。紀。氏。滝。左。馬。允。季。重。の。三。男。刑。部。左。衛。門。尉。重。定
 出家。仁。安。二。年。宋。國。ふ。建。仁。寺。の。開。山。栄。西。禪。師。ハ。彼。土。四。明。州
 也。遇。く。相。伴。ハ。天。台。山。上。り。翌。年。の。秋。栄。西。と。偕。ふ。吾。朝。ハ。飯。了。後。源
 空。上。人。の。弟。子。と。な。り。と。改。り。て。重。源。と。東。大。寺。に。大。勸。進。職。を。補。せ
 ら。れ。即。ち。一。輪。の。車。と。作。る。其。大。き。身。と。容。可。み。て。車。の。左。に。詔。書。を
 貼。了。右。に。幹。疏。と。貼。了。別。縣。と。巡。行。一。万。民。と。勸。ち。十。餘。年。と。經。て。成。就
 也。元。久。二。年。六。月。五。日。寂。也。或。云。壽。八。十。六。と。云。

余。後。重。源。ハ。伊。勢。大。神。宮。へ。詣。て。三。七。日。の。間。参。籠。し。我。此。度。の。重。職。と。し
 の。名。利。を。偏。ハ。伽。藍。草。創。の。為。なり。何。と。と。速。成。就。圓。満。せ。ら。れ。り。と。
 丹。誠。と。抽。で。祈。請。と。せ。ら。れ。り。と。三。七。日。満。る。曉。の。夢。の。中。ハ。唐。装。束。と

九

童子方寸の玉と授けたりを見て覺て其の彼玉現し袖のうらみあり。
 重源ありの尊と感涙もあはれ是と得て首かけ。諸國と勸進を
 する。綾羅金繡錢貨米穀金銀銅鐵絹布綿馬のたぐい心小任せて
 出来ると風小州木の廢くまでし。
 壽永元年七月上旬小源空上人上西門院の招請あり。七日の間御説戒あり
 沙弥戒具足戒少律義戒等の御説法あり女院より官女群臣感涙
 をもたせり。あるふ一の小蛇初より唐の工小蟠屈。七日の間動もとたぐ
 耳と側を勢とあり。説法を聴聞するも疑する。奇異の思とあり。
 廻向結願ありて講會する時。彼小蛇唐垣のふりより落死し。
 その小蛇の口より十二三なりうらう童子唐装束して鬘州のひらぎ。天よりて
 昇ると女院月輪殿の御えあり。以下の人々の目より蝶出ると天より上るとも。
 ちのちの不同れども正しく蛇業と免まると天上へ感づる。よりへ惠表比

十

丘武當山ありて無量義經と講讀せし。聲をきく青雀歡喜苑小生せりと
 斯の如きと思ふ。此小蛇も大衆の結縁ありて天上小生と侍るなり。
 源空上人の既小聖道門と捨て浄土門小皈し。念佛三昧の大導師と成り。
 其の惠心僧都要集と作て念佛往生と勸りたり。日本小浄土宗と
 する宗音あり。又禅林寺の永觀律師往生講の式往生捨因と編て念佛
 往生と勸りたり。是も又浄土宗とす宗音弘まり。天竺大
 唐小浄土宗とす宗音あり。天竺ありて菩提流支の聖財論小出たり
 又唐土小ありて元曉の遊心安樂道慈恩の西方要決加才の浄土論小出
 たり。程小源空上人。天竺唐土小浄土宗とす宗音のありと考へて。
 日本ありて念佛往生の宗音と初りて弘め。浄土宗と号し。六十余州に
 弘めて。他力の信心と勸りたり。念佛往生の太祖たり。
 備又源空上人の山門を初りて師近たりし。持善坊の阿舍利源光の慈覺

大師の譜弟、慈惠僧正の徒弟ありて、惠信の僧都、皇圓阿闍梨等も弟子なり。則ち光学法印の写瓶を四明天台相生の流に於て、天晴の明匠と稱む。一流の長者なり。然るも斯る碩徳を諸宗の習学とせり。又いふも異業に任じしり。此度の修行にて成佛すべし。然れども人の生と更れ、隔生即忘とて、今佛法修行も処と忘る。所詮生と更らば、彌勒菩薩の出世に値奉りて、悟を開んば、如く。かまは長命をせん。叶うと長命の術に蛇身とて、有る。何の國ある。然るも池ありとて、弟子等と諸國を遣はし見せり。時、小東海道を巡歴す。但馬の註記澄算とて、小僧とて登りて言す。遠江國笠原庄に櫻の池とて、信南の滄海万里あり。北山林森々とて、海と去る。遠くは奥の池あり。信南とて、源光これと聞き。其領主に誰ぞとのなき。信南は徳大寺殿の所領と申し、備へ源光が檀越あり。惜むるも、所存あるとて、沙金

百兩とて、永代放文とて、去嘉應元年六月十三日命終の夜半、掌の水と乞て是とて、終に波あり。其後雨ふ。風吹く。彼池あり。水増す。大濤とて、池の中の塵悉く拂ひあり。諸人耳目と驚く。彼所より領主に注進あり。時日と考へり。彼阿闍梨命終の時、日と有る。當時つらとて、静る。夜に池中に鈴の音聞ゆ。言傳ふ。源空上人の言く。智恵あり。生死出づ。道心あり。佛の出世と願ふ。浄土の法門と知り。故に斯の如く、異業に著し。我浄土門と今七八十年已に、見出し。師通に往生の益と授奉り。諸宗とて、口惜き哉とて、落涙あり。御弟子等言く。聖道門の諸宗に依て、生死と離る。道に候はば、源空言く。一代の諸教、區々も皆殊勝なり。初華嚴の事理圓融法界唯一心の觀、阿含の四諦縁生觀、方等の彈呵褒貶觀、般若の盡淨虛融の觀、行法華涅槃の唯一乘醍醐拈捨

の妙藥。頭密大少推實。その益甚し。斯の如く深理の法門へ習学する
 とすも是と行い遂るべき。源空の如く大略修行せしむも末世にお
 よび濁世ふるわれれば機分切らざる得道するは時機相應して念佛の法
 小治定しく神人小弥陀の誓約を頼り奉り仰る。其後あるべき弟子
 等四五人召具して遠江國櫻の池に至りて池のほとり塵も草も茂ら
 ず漣漪をうら上人も徒勞む。阿弥陀經と四五卷念佛數百遍を
 のいふ。淺く大蛇のすゝめて水上に浮出たり。源空妻落涙し願ひ
 誠の源光にてはるべき。本身小復して現せむ。斯の如く異業に住せし
 わんげんと愚案の甚しんを引導せられれば蛇形忽ち水中に没つんで
 後行法の躰と現し又浮出たり不思議なり。事ども明義抄
 據る源光寂しむ時嘉應元年と有る源空の言なりと考るは元安元年
 中の比を又一説に功德院の阿周梨皇圓蛇身と成櫻の池に任りたり

十一

功德院皇圓と叡山相生法橋先学の弟子なり。源光の師匠なり。頭
 密の学者なり。源空第二度目の師とん。何れも是なりやと
 叡山天台の座主権大僧正頭真と申碩徳あり。其初は僧都
 おもむ時兼安三年生年四十三にて官職を辞し。菩提をとりて大原
 籠居りして生死の出づるを嘆き。斯く春秋四年と経く又山に
 歸りて行法を修し。松のふもとに潜小隱遁あり。八年に
 常小水弁法印と出離解脱の言を説き。斯の如きと源空上人
 小御尋有る由申されり。頃文治二年の春相模房と云僧と使りて
 源空上人の許へ遣され。山へ御昇りたふし必に訪らせり。申兼侍り度
 との候由竹られ。源空坂本へ召りて斯と申されり。頭真を
 あひて。坂本ふるり對面し。問て云く此を如何して生死と
 侍らむと言ふ。源空いつれを御し。小過へ。頭真まことふらり

櫻池の遠江の
 國笠原の彦
 あり往昔源
 空への師通
 源光阿闍梨
 弥勒の出
 世と待人
 と入寂の
 後大地を
 成て此池小
 住の今も雨夜
 小の鈴と振音
 聞ゆると空天
 のかゝく師のませ
 小浄土門とゆるハ
 斯るまゝひの取せた
 てまろくまゝとこま



源空

櫻池小
 源空
 師の靈
 小謁也



但一先達せんたとておとされれば若思わがひ定さだめり宗しゆあり示しめす。其そのは源空げんくう上人じゆんじん云いふ
自みづからの為ために聊ちやうおのひ定さだめり日ひ修しゆむ。唯ただて修しゆむ往生おんじゆ極樂ごくらくとて修しゆむ。
頭真かみまことのつゝ。順次じゆんじの往生おんじゆ遂すなはち依よて尋言じんげんの所ところ。如何いかんして此このび容易やすく
往生おんじゆへ遂すなはち源空げんくうの云いふ成佛ぶつじやうの事こと。往生おんじゆの得安とくやすく道綽だうてつ善ぜん
導だうの意いあり。佛ぶつの願力げんりきと仰あやまて是これを縁えんと。凡夫ぼんぷ浄土じゆんじゆに往生おんじゆす。其その
後のちたゞい小問せうもん答言たうげん説せつくして。源空げんくう別べつと告つて帰かへる。斯かくく後頭真のちかみまことの
まふ。法然はふぜん房ぶどうの智惠ちゑ深遠しんえんなり。とて聊ちやう偏へんより執しやくの失あやまりと云いふ
源空げんくう此このと傳つたへ。ききたしてされば我われもさうと云いふ。必かならず疑ぎひの心こころと云いふ
もの也なり。とて又頭真またかみまこと人傳じんづゑん小問せうもんたす。まことにふ介かへり我頭密われかみみつの教けうと
まうて誓ちかむ古ふるとつひも。あつて名利なうりの為ために。浄土じゆんじゆと心こころざると
道綽だうてつ善導ぜんだうの釈しやくも。法然はふぜん房ぶどうあり。誰人たれも如此このごとく。と
出いで。此言このことば不恥ふちく百日ひゃくじつの間ま大原おほはらに隱居いんきよして。浄土じゆんじゆの三部さんぶ經きやう天親てんしん

龍樹りゆうじゆの論文ろんぶん善導ぜんだうの五部ごぶ九卷くわんの疏しゆ。五祖ごその釋論しやくろん章疏しやくしゆと聞きし
わひ。義理ぎりと案あんじやくを良よく。其後そのち弟子でし等ら小對せうたいひての言ことば。頭真かみまこと既すでに
浄土じゆんじゆの法門はふもんと見覺みかくり。夫おつも不審ふしん多おほく。今いまも不審ふしんとて法然はふぜん房ぶどう
談だんをも公こう有ある。故ゆゑに法然はふぜん房ぶどうと招請しやうせいして不審ふしんと明ある。わひけり
各おの々おの出離しゆりの大事だいじの御法門ごはふもん聖道せいだう浄土じゆんじゆの折角せつかくと。争まをす御一人ごひとりと
聞きく。此邊このへんの碩德せつとく達學たつがくとて召聞めいききされて。不審ふしんの條じょうと
立仰たてあやます。信しんとて言ことばを。さへ各おの々おの候まをす。仰あやまれば。相模さうもの阿闍梨あせり
小廻文せうまひぶんと書かて持もて廻まり。法然はふぜん房ぶどうの方かたに侍従しやくじゆ已講いかうと使者しやくしやとて仰あやま
り。先項せんかう言ことば。浄土じゆんじゆの法門はふもんは。程大原ぢやうだいげんに隱居いんきよして見覺みかくえ侍まをする
夫おつも諸宗しよしゆの談だん。如相違にやうちゑの間ま。落居らくきよの事ことも。必かならず某日まことひ立つ。とて
わひ。法然はふぜん御返ごへんと云いふ。兼知かねちや。候まをす。参まをり。兼かねて思おもふ。とて。とて
る。とて。頭真かみまこと僧都そうとの廻文まひぶんとて。文治二年ぶんぢにねん秋八月あき上旬じやうげん洛北らくはく大原だいげん

勝林院の左禪寺本堂或いは六堂云々。八宗の碩字ハハ。光明山僧都
 明遍高野侍従已講貞慶。長樂寺の印西聖人所々の
 通世の人々ふ。當所大原の本性房湛敬。嵯峨往生院の念佛房天台大原
 来迎院の明定房蓮慶。善提山の中尾の蓮光房東大寺の僧。蓮契上人師弟
 山門久住の輩六。大僧正智海天德。權大僧都證真天台。靜嚴僧都竹林房
 眞言佛心。權少僧都覺行。淨然法印。權少僧都空阿房慧光房。此外妙覺
 寺の上人覺行僧都。堯禪。善提山藏人入道。佛心房安然。野山眞說。長樂寺定蓮
 房天台。八坂大和入道。見佛天台。松林院清淨房。櫻本の寔法房。聖光房等也
右大原談義。又明義抄六。此外淨賢法印。淨憲法印。仙義律師。學秀僧
 都淨寧法印。生馬の上人松林院。仰德房觀佛房。神樂岡の淨空房。中山信蓮
 房淨遍僧都。實惠上人寬雅法印。慶雅法橋。醍醐の座主。空範石山。僧都覺圓
 高尾の慈蓮房。寶寺の求法房。仁和寺の勝願房。範頭僧正。眞僧正。極尾

明惠上人加。就中明惠上人傳。兼安三年正月生。九歳高尾
 の文。覺小。徒ハ。十六歳剃髮。十九歳梅尾山。止盛賢首
 宗と唱云。云撰。小文治二年ハ。十四歳未得度。未得度セ。已前。云々
云々。此ハ。論義小。集會あ。云々。非云々。云々
 右證真靜嚴寺。己下。山門の碩字三十余人。并南都北嶺。有智二十余
 權依。參集覺行僧都。堯禪聖光房。等と首領諸宗の碩字
 二百余入。三井の大貳僧正。公胤上首。と門徒の學通。百余人其。余惣云々
 廻文預。心老若。大學通。三百余人あ。ハ偏執。の後あ
 或ハ。道嘆。彼是集會。列座其。余聽聞の道
 俗貴賤二十余人。来集源空上人。ハ斯。の南京北嶺寺。院邊土。の碩德
 大學通。念佛偏執。の人々集會。程大義。ハ夢々。あろ。唯後
 生善禪。の為。小聖道。淨土の相違。自力他力。の衆生の機分。等安心。の所詮

と思ひ仰弟子も唯世の常の法談と心得。かる道と覚悟しぬらん。何の
 用もなきに。初心晩学の愚癡元智の入道等なり。供養せり。其中
 にも東大寺の大勅進俊乘房重源。隆寛律師。皆空安居院法印。聖覚を
 上首として。彼是二十余人なり。源空聖人の例の事と思召て。龍禪寺に至り
 たりて。寺門をきり。眼を見たり。三百余人の高僧二行み列坐せり。發起
 の願真上坐して。左のそばに大原の本性上人。堪敷右の方ふ。實範。碩徳。尤
 右ふ別とて。著坐あり。弟子の人々是と見たり。あや此をよき所なりとて。
 法然上人。浄土の宗義とて。ききせり。とての沙汰。或は憤難。後折
 と得て。各同心。来集せり。と覚えたり。此のびの聖道。浄土の勝劣。大小
 権實の對判。結句と見えて。しるる。文珠舍利弗の智慧。たりとも。叶ふ。三
 百余人。學僧。上人。法門。ふ結了あり。我情の手枝とて。あてたり。水く。浄
 土宗の旗才と倒し。折ると。義定の氣色あり。とれり。實は古今稀代の宗

論得道の折角なり。源空一期の御大事。くちあ過。と見え。御弟子達に
 我師。近今日と限。ふ失。たご。を思ひあり。諸經の肝要。一代至極。た。此
 文あり。くちを破。とんと。思ひて。心も身も。漆。然る。所。源空御弟子等。小言
 皆人。見と。扶持。髪と。け。う。手足と。洗ひ。物と。敷。く。骨と。折。て。弟子
 と。持。ふ。源空へ。え。く。骨。も。折。ら。て。二。千。余。人。の。弟子。と。設。く。と。と。ら。ら。し。び
 の。其。時。御。弟子。等。此。御。詞。ふ。女。一。カ。と。得。たり。ま。り。程。小。源空。六。群。て。集。ひ
 一。聽。衆。と。た。分。く。入。給。ふ。正。面。の。脇。の。間。より。望。み。源空。の。御。供。の。中。より
 信濃國。住。人。角。張。の。七。郎。太。郎。入。道。成。阿。と。り。者。上人。の。御。袖。の。下。より。潜。通。く。て
 上人。の。御。前。ふ。立。塞。す。當。坐。の。氣。色。と。見。ま。か。上。座。せ。ま。り。り。り。頭。真。高
 麗。縁。の。置。二。帖。重。り。て。其。上。効。の。皮。と。敷。く。座。せ。ま。り。り。上人。の。御。坐。と。見。て
 大。紋。縁。の。置。二。帖。重。り。て。敷。く。是。ふ。人。も。座。を。ざ。ん。成。阿。思。ふ。や。上人。の。御。座
 ふ。敷。皮。も。か。し。ち。れ。一。段。さ。が。う。り。り。敷。皮。を。對。て。敷。く。の。や。あ。と。此。彼。と。見

廻せし物も如何せんと思ひ煩ふ程に礼盤に三重縁の半帖あり身を見
て成阿は末座なる若学通ぶもの居るに左右の袖と分けて無禮なる
まわり通る候ふ上人の御座をけり候ふ止と得む候てと通る佛
前なる禮盤の半帖より上人の御座に重りては後座に跪禮扇と抽
上人の方より是を御座を候へ入せよと言ふ源空をわら座に
著たすに廿余人の座敷よりいせん立煩ひなり成阿より御房より
是に参りて今日に於自宗他宗の得否今日に限らず出離一大事の御
法門聽聞仕んと我人思ふ生を受る幸ひなれ人身の思ひ出宿善の程
是よりぞぞぞお嘆息居りなり廿余人の成阿が詞ありて一度入る上人
の御より佛檀のまより居流まきなり三百余人の学通若子の聽衆等
目ももめて源空の御貞とまりり成阿が拳動と見ゆして假令内談し
たりも只今の中その可様な拳動よりも覺え守初声の一言と以て法性の深

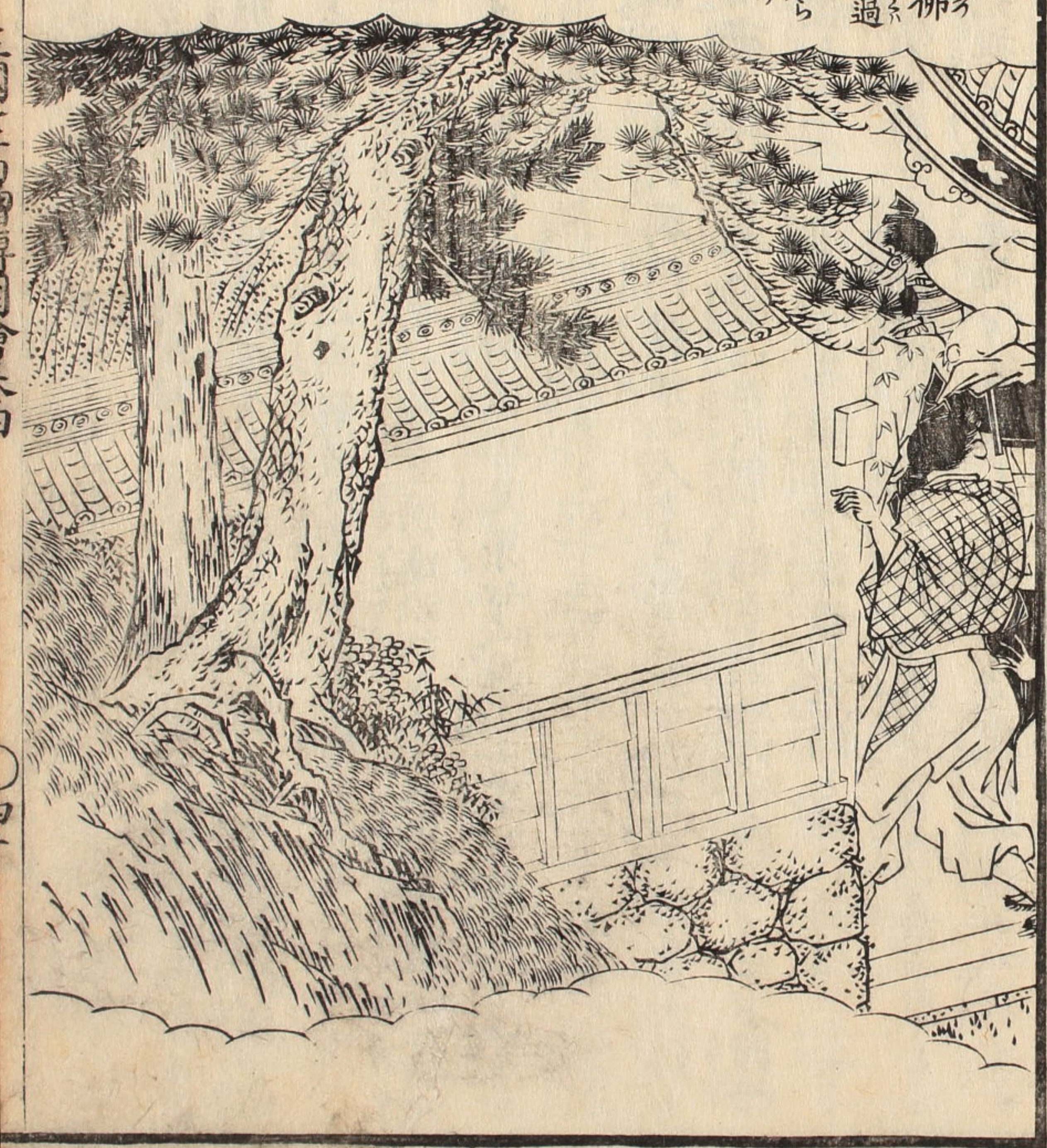
厚と知ると云法然房の智小我等と肩とも思ふの也今此入道も斯
の如く拳動より斯る形勢あり今日の問答ふ必と結ぶると思ひぬ
るも後小懺悔ありしと源空當座の氣色と見ゆふ其日の問答の
問口は大原の本性上人と見えり題者へ南都の範頭僧正精義者へ寶
持房法印註記の嵯峨の竹林房法印靜嚴の前小大卷のつぎ紙一巻あり
る範頭僧正の前小の釋柏子一帖あり是は源空より法門小煩より
打々よりと云と料と見えり元月支震日あると日本一の宗論たり
る程に座敷さまり東西もさまりり此時第一番小頭眞僧都同て云く
速疾小生死と離れ解脱と得る眞言止觀華嚴禪門等と以て最上
と至極と云と源空答て云法門無盡なれ其急要と論じふ
浄土の法門と云と勝まりとい諸教廣多るも其肝心と云と小
他力頓教と云と勝まり是則ち修し易く功高し行安し理深

大原五禪寺
於諸宗法論
の圖

大原問答の古跡ハ
京洛北山大原の御
子今魚山勝林寺
といふ本尊と證據
の阿弥陀と号と
文治二年法然
上人と山門の
學徒諸宗
の碩徳と論
議ありしと
本尊光明と



放りいしを
則ち専修念佛
の利益他不超過
せ證拠と知ら
しむたふ處
ありしと



故より故小盧山師の云く諸の三昧の甚多りれども功高くして獲てやま
事の念佛と先とことり。元照師の云く念佛三昧の具縛の凡愚屠沽の
下類と利那超越も成佛の法なりと言て此等師の意浄土の教法。念
佛三昧とて大衆至極速疾解脱の最要とと聞えり

廬山師の尋陽匡廬山東林禪寺慧遠法師なり。廬山ハ南康府の西北
二十里あり古周の武王の時匡俗兄弟七人此山小廬と結んで隱居を
故小具小匡廬山と名く其山高き二千三百六十丈周二千九十里慧遠
ハ師の諱姓ハ賈氏鴈門樓煩の人なり唐の大中年辨覺大師と
謚も南唐の昇元三年ハ正覺大師と謚も宋の大平興國三年ハ圓悟
大師と謚も宋の乾道二年等徧正覺圓悟大法師と謚ハ諸傳小委し
今爰小廬山師と引證の初守誠不知の浄土宗自之の義ありと
漢朝の元祖と出も是他とて考しんと欲も。樂邦文類小云浄土ハ

生ると勸び固小大覺慈尊より出然して此方の人とて念佛三昧
ありと知しりハ應小遠公法師と以て始祖とすべしと云
諸の三昧ハ法華小十六三昧と説涅槃小二十五三昧と説般若小百八三
昧と説加之大經小百十三昧と説法華小百千万億恒沙等諸大三昧
と説仁王小ハ無量諸餘三昧とて是等の三昧の諸の三昧の中於て
功高く進易と念佛と以て先とす。是と以て念佛三昧短小三昧と説り
即此謂より問云何の故を諸の三昧の中唯念佛三昧の功德高きや答
云諸の余の三昧ハ各一隅と守つて諸の徳と徧くせん唯この念佛三昧の諸徳
圓備なり故小大論七云復次念佛三昧ハ能種々の煩惱及び先世の罪と
除く餘の諸の三昧ハ能種と除くと有て瞋と除くと能ん。能瞋と除く
ことあれども瞋と除くと能ん。能痴と除くとあれども痴と除くと能ん
能三毒と除くとあれども先世の罪と除くと能ん。是念佛三昧ハ能種々の煩

惱種々の罪を除く云。五會讚小云。然るも念佛三昧は是眞の無上深妙の禪門なり。乃至修易く證易く。眞小唯淨土の教門なりと云。

元照師の佛祖通載十九云。錢唐靈芝寺律師元照。字湛然。餘杭唐氏の子。少くして祥符東藏惠鑑師に依く。毗尼と學ぶ。神悟護公に見る。及て天台の教觀と講じ。博く群宗と究り。律と以て本す。又廣慈小徒。ひて菩薩戒と授る。戒光發現して。頓漸律義。善備せしむ。南岳一宗蔚然として。大不振ふ。常小布伽梨と披く。錫と杖と鉢と持。食と市小をふと云。佛祖統記廿八云。元照の靈芝小住と。律學と弘む。尤意と淨業小屬と。一日弟子と集りて。觀經の普賢行願品と云。加跌して化す。西湖の漁人。之を空中小音樂と聞と云。

屠沽の下類といふ。牛羊の肉と割く。こんと賣と屠と。酒と造りて。是と賣と沽と。皆賤き者なり。故小下類と云。

第二番小永辨問曰。今此淨土宗の權實の二宗の中。小權宗なり。漸頓二教の中。漸教と云。我其故小此宗の眞如實相第一義空の理と明と。只歇苦飲淨指方立相の旨と宣と。而るも何を此教と以て。大乘至極の頓教と云。源空答て云。淨土宗の實教なり。是故小或眞宗といひ。或頓教と名け。或一乘と名つるなり。但通途の權實の二小自カ小約して。これと明と。弘願の一法小於て。徧小他カ小就て之と論と。去れ。實教と云。も自カの實小異と。頓教と云。も聖道の頓小。是故小權小似く。權小あり。と。實小似く。實小あり。と。漸小似て。漸小非と。頓小似く。頓小非と。既小權實漸頓の所攝小あり。と。知れ。諸宗超過の法門なり。但權實の所攝小非と。強て眞實の名と立つ。而も他カ眞實の躰と云。漸頓の所攝小非と。而も假小頓教の稱とよ。横超横截の用と頓と。是故小和尚の云く。我依菩薩藏頓教一乘海と云。元照の云く。故小ちん。一切淨土の法門。皆これ

大衆圓頓の法有り。定く徧小あり。此等の所釋たれ。依用せしんや
永辨の繪詞傳云く。惠光坊永辨法印の證眞法印の立義の師すと云
第三小智海問曰く。大衆眞實の理と明と。是實教と名く。是心是佛の
旨と存と。是頓教と名く。今此宗の生佛一如の道理と明と。徧小
厭離穢土の安心と。寂滅無生の實義との。而も僅小欣求淨
土の起行と。専ら權門漸教の法門小附傍と。全く圓實頓速の
宗義あり。縦い事と他力小と。實頓の名尚以て心此と
得。況や權實の所攝小と。剩と超過の義と論と。源空
源空答て云く。疑難の趣き。偏せられ。自力修行の道理。約して漸頓
權實の差別と存と。全く他力弘願の密意の教門と。知らば悼
悲。夫諸佛の法。眞如佛性と。以て躰性と。無相泥洹と。して
所期と。此理と。外小全く別の法と。然るに三世の諸佛の化導の

必と聖道淨土の二門と設と。二種の勝法も。無相無念の理。入るんが
爲也。所入の理。同と。能入の門。自力他力の別あり。自力と。若し
他力と。勝と。其聖道門と。是あつて。二あり。一は漸。二は頓と。頓
よつて。又二あり。所謂教外。漸教と。所謂。漸行と。漸行は
修と。漸く佛果と。感と。修行の時。成佛の道遠と。故漸を
名づる。又名づけて。權教と。俱舍成實律宗法相宗等。此意と。出づ
る。頓教と。五乘も。真知と。以て。還つて。蠢々の心。納り。十聖と
法性として。元未不動と。證果と。刹那小究竟と。悟道と
一念小圓滿と。故頓教と。名づる。又名づけて。實教と。眞言佛心天台華
嚴等。正しく。此意あり。此等の漸頓の諸宗。其法門一途。ありて。万機と。と
ど。或漸或頓。唯一機不被と。若し權若し實。一縁小撮と。故了
即ち施。即ち瘞と。妙道遠く。沾る。故小釋と。漸頓則ち各所宜

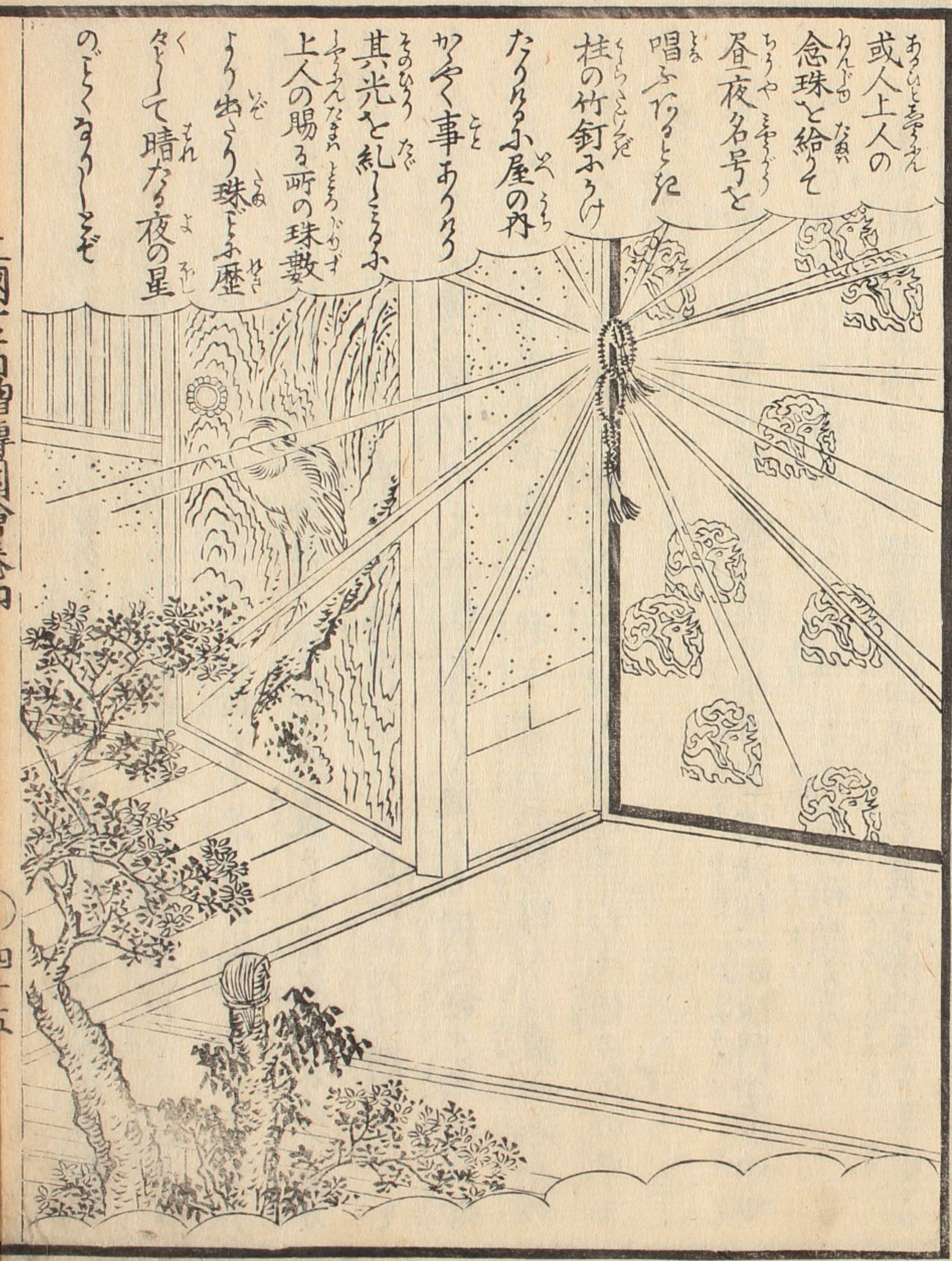
かつ縁小随ふては皆解脱と蒙る。まづ小衆生障重くして。悟とてこれ
 明ららば。又云く或は入天二乘の法とて。或は菩薩涅槃の目とて。
 乃至根性利するものハ皆益と蒙る。鈍根無智なるハ開悟しざると云
 次小浄土門とて是あつて二義あり。一ハ他力本願の實躰二ハ他力本願
 の化用なり。初他力本願の實躰とてハ所謂佛の密意なり。亦此佛智所
 照なり。ゆゑを聖道浄土の二門ハ共ハ真如實相とて以て其躰とす。故ハ
 前の聖道門の中ハ明とてハ無塵法界九聖齊圓の理。恒沙の功德寂
 用湛然の性とす。是他力の實躰なり。五智の中の佛智ハ此理と指す
 なり。次ハ他力本願の化用とてハ密意の上の教門とす。又是四智の所成
 なる。極樂遠くばとて。十方億刹の西も。彌陀已心ありて。一座花臺の
 形と現也。不思議智不可称智等ハ此善巧方便と指す。實ハおんれハ
 真如奥の内ハ生佛の假名と絶。平等性の中ハ自他の差別也。真如自

あ。他力なり。て。あ。と自他の性と包。か。つ。あ。ハ。小鎮。ハ。自他と。熏習。と。く
 平等性の性海ハ會入せしむ。應ハ知。ハ。自力他力と。ハ。是則強弱の義なり。
 それ熏力弱きと。ハ。真熏密益と。と。ハ。行入。と。ハ。勵。と。ハ。道
 果と得也。故ハ自力と。ハ。熏力強きと。ハ。諸佛外護の智識と。と。増上縁
 と。ハ。故ハ他力と。と。強弱あり。と。俱。ハ。真如の力なり。ゆゑハ
 真如奥の佛平等性の衆生の爲ハ。一心法界の理と開示せん。欲。ハ。所垢
 障覆深の凡夫自力と。以て。自己の淨躰と顯照。ハ。故ハ。諸佛奥極の
 慈悲衆生迷倒と。ハ。法藏發心と示現。ハ。超世の弘願と發起し。
 易行易修の口称と。と。頓悟頓入の往生と得。ハ。他力の實躰と。ハ。小
 顯。ハ。易。ハ。弘願の化用。ハ。易。ハ。曇鬘法師ハ。安相。ハ。物。ハ。二義。ハ。約
 して。知。ハ。修行の相と。親。ハ。此意。ハ。然。ハ。即。ハ。因。ハ。少。ハ。果。ハ。多。ハ。行。ハ。淺。ハ。而。ハ。
 悟の深きと。ハ。他力頓大の教。ハ。と。是。と。以て。これ。と。言。ハ。小。頓。の。名。ハ。

念珠光明と
放ちて四面
と照と圖



或人上人の
念珠と給て
晝夜名号と
唱ふりつと
柱の竹釘ふり
たりつる屋の
かぐ事あり
其光と乱し
上人の賜る
所の珠數
より出り
珠とふ歴
々して暗
なる夜の
星の
のどく
なりしと



同じとて諸宗の頓ふちえ。實の名同じとて。餘教の實ふ勝る。思て
 知つべきもの。凡他力の法門ふ於ては諸宗の證ざる處。諸師の判せざる所なり
 善導和尚は此宗義とて我宗の祖師とて此宗門を開くものなり。
 凡聖道自力の法門ハ諸佛無極の慈悲との盡すと無塵法界の上他力
 弘願の躰用とありて有べし。浄土の宗は斯の如き法門とありて
 あれば他力の大道ハ廣弘して立乘ひて通入を圓々極々無相無念
 の果成の上無方難思の大道と起て有相の修因なり。直ふ無相の
 樂果ふ入る往生の見と抑て無生の理と躰達せしむ。何の教の中ハ
 斯の如き法門と明とや

智海へ繪詞傳四十二巻。檀那院の嫡流智海法印ハ毗沙門堂の法印
 明禪の師なりとて。叡山ふ久く住して天台の碩學なり
 第四番ハ叡山の東塔竹林坊靜嚴法印問て云く。眞言佛心天台華嚴か

直ふ眞如の淨躰とありて事と期と。是則上根利智の機のたらし儲けざる
 所の法門なり。下根下智ハ垢障覆深うて敢て此利と顯照する事あり
 べし。是爲浄土の化義とす。け口稱の一行と授け。彼ま引入て後ハ
 見佛聞法の縁ふらう。無上法忍と悟らして。眞如の理ハ入事
 と得て。是とて之と謂ふ。聖道浄土の眞如の所期とて之とて
 浄土門ハ猶と遷廻の道なり。頓と名くとも。華嚴法華の頓ふ及べざる
 いん。源空答て云。此難大抵は會通せしむるなり。根機ふ於て利鈍
 と論じ。相望不定なり。聖道の二門ふつて。是とて時ハ漸と鈍と
 名づけ。頓と利と名く。聖道浄土相對ふ時ハ。惣して聖道門と利と名
 づけ。浄土門と鈍と名づけ。是一往の義なり。如何とれば。修むる能修
 べし。悟難く。能悟る。故ハ聖道自力の人と利根と名づく也。浄土
 門ハ安く行じ易し。故ハ難と捨て易とて。之の辺ハ。且鈍根下機同ト。

然^らん^んと^んも^も再^さ往^{わう}と^ん論^{ろん}ず^る。聖^{せい}道^{どう}淨^{じやう}土^どの二^に門^{もん}を^のり^り中^{ちゆう}に^ち就^{じゆ}て
淨^{じやう}土^どの^の中^{ちゆう}に^ち利^り根^{こん}有^{ゆう}智^ちの^の人^{にん}他^た力^{りき}實^{じつ}躰^{たい}の^の智^ちと^得無^む塵^{ちん}法^{ぽう}界^{がい}の^の理^りの^の上^{じやう}に^ちあ^あつ^つて
洄^{かい}沙^さ功^{こう}德^{とく}の^の化^け用^{よう}と^施一^{いつ}垢^{こう}障^{じやう}覆^{ふく}深^{しん}の^の凡^{ぼん}夫^ふと^攝淨^{じやう}躰^{たい}頭^{とう}照^{しやう}の^の悟^ごと^得せ
る^ら。如^{ごと}く本^{ほん}願^{がん}他^た力^{りき}の^の大^{だい}道^{どう}に^ち入^いり^り頓^{とん}小^{せう}廓^{くわく}然^{ぜん}大^{だい}悟^ごの^の無^む生^{じやう}と^證を^全く^聖道^{どう}門^{もん}
の^の上^{じやう}に^ち智^ち利^り根^{こん}の^の人^{にん}に^ちあ^あつ^つて^も凡^{ぼん}聖^{せい}道^{どう}門^{もん}の^の諸^{しよ}教^{きやう}に^ち利^り鈍^{どん}も^も小^{せう}究^{きゆう}と^與へ^てあ^あつ^つて
る^らん^んと^ん云^いふ^ふ隨^{ずい}緣^{えん}一^{いつ}途^との^の益^{えき}と^あつ^つて^も奪^うて^も而^し之^を論^{ろん}ず^る。小^{せう}方^{かう}中^{ちゆう}に^ち是^ぜ
と^得ず^る。故^ゆに道^{どう}縛^{ばく}の^のい^いづ^く仰^{おほ}む^むん^んと^いふ^ふ大^{だい}聖^{せい}三^{さん}車^{しや}の^の招^{しやう}慰^ゐ且^じく^祥麈^{じゆ}の^の運^{うん}
也^や。權^{けん}不^ふ息^{しき}て^まだ^だ達^{たつ}せ^ど。徑^{きやう}小^{せう}大^{だい}車^{しや}と^奉ず^るも^亦一^{いつ}途^とに^ち唯^たく^く現^{げん}在^{ざい}即^{じつ}
位^ゐ不^ふ居^きと^峻徑^{きやう}と^長と^云淨^{じやう}土^どの^の真^{しん}門^{もん}に^ち極^{ごく}惡^{あく}最^{さい}下^げと^以て^捨と^いふ^ふ
況^{きやう}や^上根^{こん}と^本願^{がん}の^の密^{みつ}意^い弘^{こう}深^{しん}と^他力^{りき}の^の教^{きやう}門^{もん}頓^{とん}遠^{えん}と^利根^{こん}と^入ら^ざる^を
凡^{ぼん}や^智者^{ちや}も^不是^ぜと^思擇^{しやく}と^んや^但直^{ちやく}入^にり^て迂^い迴^{かい}の^の辺^{へん}に^ち至^{いた}つ^て自^じ力^{りき}に^ちあ^あつ^つて
是^ぜと^云ふ^ふ誠^{まこと}に^ち此^{こゝ}に^ちあ^あつ^つて^も證^{しやう}入^にり^て期^きと^是直^{ちやく}入^にり^て佛^{ぶつ}圖^ずに^ち往^{わう}生^{じやう}と^させ^りと

得^とて^迂迴^{かい}に^ち似^にたり^とも^横超^{ちゆう}断^{だん}の^の辺^{へん}に^ち約^{やく}せ^る有^{ゆう}相^{しやう}の^の念^{ねん}に^ちあ^あつ^つて^も無^む生^{じやう}の^の國^{こく}
不^ふ入^にり^て聖^{せい}道^{どう}の^の直^{ちやく}入^にり^て超^{ちゆう}勝^{しやう}と^如何^{いかん}と^いふ^ふ自^じ力^{りき}直^{ちやく}入^にり^て直^{ちやく}如^{じやく}に^ちあ^あつ^つて^も難^{なん}く^法
性^{じやう}に^ち有^{ゆう}教^{きやう}無^む人^{にん}有^{ゆう}名^な無^む實^{じつ}と^往生^{じやう}淨^{じやう}土^どの^の頓^{とん}入^にり^て真^{しん}如^{じやく}法^{ぽう}
性^{じやう}と^以て^法藏^{じやう}の^の行^{ぎやう}回^{かい}ふ^きら^り佛^{ぶつ}智^ちの^の所^{しよ}照^{しやう}に^ち謙^{けん}ら^じは^是と^他力^{りき}實^{じつ}躰^{たい}弘^{こう}願^{がん}
密^{みつ}意^いと^名づ^くる^也。其^{その}證^{しやう}悟^ごと^以て^頓小^{せう}善^{ぜん}惡^{あく}利^り鈍^{どん}の^の凡^{ぼん}夫^ふと^開悟^{かい}せ^りん^が爲^なす
發^{はつ}給^くふ^所の^の超^{ちゆう}世^{せい}の^の本^{ほん}願^{がん}と^故に^諸宗^{しよ}の^の頓^{とん}法^{ぽう}に^ち超^{ちゆう}て^此道^{どう}理^りと^顧び^淨土^ど
の^の一^{いつ}教^{きやう}と^以て^下根^{げん}最^{さい}劣^{りやく}の^の法^{ぽう}と^すと^もや
靜^{じやう}嚴^{げん}繪^{えい}詞^じ傳^{でん}三^{さん}延^{えん}曆^{りき}寺^じ東^{とう}塔^{たつ}竹^{ちやく}林^{りん}房^{ぼう}靜^{じやう}嚴^{げん}法^{ぽう}印^{いん}吉^{きち}水^{すい}の^の禪^{ぜん}房^{ぼう}に^ち至^{いた}り^て
て^此度^{このたび}に^ち生^{じやう}死^しと^出離^{しゆり}と^源空^{げんくう}と^尋申^{しん}度^た侍^じれ^と答^{こた}ふ^法印^{いん}と^決擇^{けつたく}門^{もん}に^ち去^いり^て出^{しゆり}離^りの^の道^{だう}に^ち於^おけ^り智^ち德^{とく}に^ち至^{いた}り^て道^{だう}心^{しん}深^{しん}く^まし^を定^{じやう}て
案^{あん}立^りの^の義^ぎと^申さ^るれ^ば源^{げん}空^{くう}に^ち弥^み陀^たの^の本^{ほん}願^{がん}に^ち乘^{のり}て^極樂^{ごくらく}往^{わう}生^{じやう}と
期^きと^外に^ち全^{ぜん}く^知ら^ざり^て法^{ぽう}印^{いん}又^{また}曰^いく^愚意^いも^美言^{びげん}と^兼つ^て愚^ぐ案^{あん}と^堅

せん爲ふ尋申所より但し妄念競ひ起り侍りふ如何せん上人の言くられ
 煩惱の所爲されば凡夫の力及ばず唯本願と憑んで名号と唱ふまげ
 佛願力も兼して往生と得る。法印信心決定して疑念たらしまらふ解
 往生更ふ疑ひなく退出し給ひぬ云々問く云法印既ふ疑念たらしまら
 解を今何を此問と發するや。答て曰但し問の意と知りて

第五番ふ明遍僧都問て云く禪宗ふ教内教外と云く而も教外
 一法として諸教の法門と取括ぐ眞言ふ顯密の二教と判して顯教
 と云て遮情門と秘密として表徳の法とも乃至天台ふ五時八教と
 云く超八醍醐の法として三五七九の諸法の上ふ置く此等の諸宗皆
 以て深奥なり。輒く其境ふ望まざり。然るふ今教内と以て教外と下
 顯教と云く密教と云く爾前として法華と嘲を諸宗の人を許を
 べく如何源空答て曰凡宗と云法は各自宗の法として勝るは他宗の法

と以て劣るは其義問端ふられ苟も疑執と懐くもこれ故ふ禪門
 ふの教内と以て考へて。教外と以て至極とすこと。而も是は此一宗の執見なり
 他宗ふ全く是と許さずは故ふ眞言ふの秘密と以て最上乘の法とす時
 禪宗の無心絶想の義と是顯大遮情門ふ属とす。自餘の諸宗これ准
 べし。今浄土宗の意は漸頭の諸教ふ眞如佛性と以て所期とするとも。あも
 自力の修行の解し給ひ入るは。故ふ劣ると。念佛往生の施戒忍進と
 修ては禪定般若とも學びて觀法觀心とも用ひて身印口誦とも假して坐
 禪工夫をも依らる。唯他力口称の易行として直に極樂无爲の密國ふ入
 頓悟頓入の功德と云ふ諸宗の法門ふ超る。故ふ勝るとす。此故ふ永觀
 の日實ふ知弥陀の名号は殆陀羅尼の徳も過る。又法華三昧の行も勝り
 たり唯佛名と称れば直に道場と至る況や浄土往生せん。豈留難ありんこと
 第六番ふ貞慶問て云。他力の頓と往生以後の得悟自力の頓と。現世ふ即ち

證入と聖道とを以て勝るなり。浄土と以て考ふことなきや。源空答ていふ
聖道門の人即身の證と期とし。唯是自力ありて他力の持多し
故に現世の證入の万が一もれず。縦いふ所なく證悟の人有と云ふも強く
無塵法界の一理ふをゆて。他力洄沙の功德。無方無礙の化用と出さず
故に佛法の至極と知らる。浄土の願教も或は現世或は次世根の利
鈍ありて證入疑ひたり。猶これ勝るるとすべし。

貞慶は藤原尚書貞憲の子なり。母夢ふ高祖未のて自稱して貞慶と云。
懐ふ入を見て即ち懐妊と成長と後薙染し書と母奉る署ふ貞慶
と云。母夢想の名と同じくして奇とす。興福寺に投じて出家せしむ
才の譽あり取勝講の詔に應じ。あれも貧しくて乗物奴僕と人なる會
衆を其破り衣と匿ふ笑ふ講已て直ふ笠置の窟に入て坐。解脱工人
と云。法相宗にて天台浄土と兼。碩徳あり建曆三年二月二日卒す年五十九と

第七番小證眞問云く此宗の習い小此土の入聖得果と許さば。うんぞ現世の
證入と云ふ。源空答て曰。此事誠ふらんと思ふ。但一韋提希夫人第
七觀のよみ於く。大悟無生と得ると和尚これと釈して證得往生と云。これ
と云ふ最上利根の人。他力本願の利と信知して現世に往生と證得
らる。往生といふも無上なり。此義をわけて思釋とす。第八小頭
眞僧都問曰。和尚の意浄土の法門少りて無相離念の義をゆるす
何ぞ今無塵法界の理と云く。名号の實躰とすといふや。源空答ていふ
有相の修因ふ約し無念の果證とさるなり。諸師せらるる得て修因感
果にも無相の義と存して有相の願求と捨故に是と破らる。他力
の實躰と論じらる。和尚の心無相離念の義と云ふもきつり。故に釈ふ
はく。無生實國への常と云。又云く彼無生を見れば自然に悟る
云。又つて覺えは真如の門に轉入と云。又云く法身常住して居る

虚空の如く云々第九湛敷問て曰く天台宗の意は權教に有教無人也
 圓教非んば成佛の法云々淨土宗の意又念佛往生の外は出離解
 脱の法云々源空答て曰く玄宗の習い廣く教相と判
 て衆機と納じよと終一味の法は歸するなり小乘は猶所學の法
 にあらず至極の想と云々如何ふらんや大乘とや故に諸宗を我所立
 と以て至極の他所修と以て方便とす云々淨土宗は聖道淨土の
 二門をまゐる本意の二往二門とて其益と許すと云々再往とて時
 聖道の益と奪を淨土の一法より入りたり此故に真言止觀の修行
 と證悟の云々淨土の果報と得華嚴禪門の悟入も解
 脱と遂る日自然法王の家に至るべし佛土に至るべし佛身と
 念ふべし諸教を念佛より淨土の中は極樂と最く諸佛の中は弥陀
 と本と彼佛とん淨佛國の主諸佛慈悲の躰より往生と云々諸教諸宗の悟道

の時の名なり茲ふ知ぬ未だ悟らざるの前は暫く隨縁の執情を封じて自
 力の得道と期して淨土を願ふべしと得悟の後之を以て泥洹の樂邦と
 入る終ら道場の妙土ありと云々三世の諸佛は念佛三昧は仍く正覺と成
 るといふ此意あり是と思ふ第十俊兼房重源問て云く一切往生の行人
 必と生無生の道理と知る名号の躰用の義理と心得く淨土の行と修すべき哉
 源空答て云く爾も今他力の躰用と明とる淺深と論む時宗旨の
 原する所とありらる爲なり是智者の知る所なり一切の行人これと知し
 と云ふ非ざる例は三心具足の行人なり淨土は往生と經教もこのなり
 下智愚鈍の族田夫野客の輩と云く三心の名義も暗く云ふ弥陀の名
 号と稱するもの必だ往生を得ると信ずれば自然に三心と具足を云々如く
 名号の躰用の義と明むるとも又以て是は準て造罪の凡夫具縛の底下
 一念十念の功力ありて決定して來迎ふべしと信知すれば即ち是他力の

實躰と信じ。生無生の道理と心得るふ當り。如何に極樂あり。無漏真實の勝相泥洹無爲の樂邦あり煩惱具足の凡夫容易以て入じ。あつた而も他力本願の不思議あり。罪障の輕重も論じ戒行の持。犯す言はれれば必生ると心得る信じて自然ふこれ當る名号の躰。用と心得るあり。他力と離して是と云は義誠ふ成ずべし。他力あり佛智の照覽あり。第十一ノ頭眞問て云く他力往生の義猶うつく。躰用と信むる義あり。第十二ノ頭眞問て云く他力往生の義猶うつく。明るべ罪惡の凡夫佛の願力ふ託して無漏寔園ふ生じ。他作自受の義あり。因果の道理ふ叶は。源空答て云。凡眞如法性の理の自ふ非。他あり。修因あり。感果あり。無因果の中強く因果と論じ。時既自の修因ふして感果といふ。何ぞ又他の縁あり感報せしむん。彼縁覺の聖人。飛花落葉の因果と待て。煩惱と斷じ。

道果と證じ。草木無心あり。猶修道の縁あり。況や弥陀誓ひと發じ。つる。往生の便あり。但し聖道門の意へ行者の自行猛利あり。時ハ他佛加被と垂り。故自たつ。他力ハ弱し。故自これ自力あり。他力の持し。淨土門の意ハ三心と發し。名号と稱て。造惡も止む。妄念も息れば。行者の自力ハ至て弱し。然る佛願力つて。惡業も障られ。妄念も滯られ。名号と稱て。必往生と得る。本願名号の力ハ強く。行者の自心の功力あり。故自他力往生あり。是又回縁與報の義あり。一向の他作自受もあらず。強弱の義と約して。自力他力と分別あり。第十二ノ永辦法印問て。罪業妄念ハ任他。専ら称念すれば。必ず往生と。詩人ハ惡見ふ住して。惡業と恐む。好く衆罪と作て。妄念と返つて。惡趣ふ墮と。一往先惡と制し。妄と止む。以て安心の面して。鹿強の罪と。一むんや如何。

源空答て云く諸悪莫作諸善奉行の諸佛の通戒なり。又云く造悪の元
夫も念佛して往生せしむる義の全くはして悪業と造りて妄念と起せしむ
ふらあつて今悪趣の苦果とせしむ浄土の快樂とせしむ者三業の罪と
制断し三業の善と奉行とせしむと此道理と知らばも愚痴の凡夫をれが
更ふ妄念悪業と制止せしむ。此事歎くもあつて余らあり。おそく
此も弥陀の本願の如きの凡愚と救はんが為。易行易修の名号と以
て犯罪の咎と契せしむ。此意と得るの徒。かんて事と他力本願しせせ。
好く大悪と造るんや。縦又煩惱強盛なりふりて。娼酒肉辛と禁せず。
貪愛瞋憎とやうきりふの好く悪と造るふ似たりとて。唯是本性乃
り守りて本願と頼むらして。今更へ是とたてしむと許さふ。非と云れ。能
強の罪をひいて聖道浄土もふ後世と恐るるの人。かんて是と禁せしむ
細隠の罪をりて聖道浄土の浄きしむ。誰れと制止せん。おそく造

悪より軽次重の三品あり五逆の重罪なり。是と造らばのまれなり。
在家の十悪の中殺盜の二罪へたゞと禁せしむと有らば。自
余の八罪へ盛んあ是と犯す。出家の罪あ於て。持戒の人あれば破戒
あり。戒法と持つらんや何やうて毀犯するにあん。無戒の僧尼不
あいては在家と差別あり。縦いふらふ娼酒肉辛と禁せしむ。唯是
一旦の制禁なり。妄念と止せん戒行具足といふ。然るも虚受信施
不淨說法等の自余の衆罪補て討ぐる。戒禁の所の罪のぶらふ一兩なり。
犯す所の悪へ數塵沙も過ら。斯のどての造罪の徒自力と以て争ひ解
脱を得べんや。此故に他力本願の滅罪増上縁の功用と頼りて念々の称名を
以て隨犯隨懺せらる。但し悪見と禁せしむ。安心の面をすべしと云う
はつては犯罪のりの解脱と得るは。是聖道門の安心なり。悪業と造
らばも名号と稱しは往生と得るは。是浄土門の安心なり。此もふ

聖道と捨て淨土を飯より温觴の罪障と制しけり。若夫罪業と制伏
 一妄念と息べんべ戒定惠の三学づまの法これと修行せしん故不知也
 此見と成むる人の永く他方本願と信じてる者なり。努々是と思
 ふべし。淨土宗の義理念佛の功力弥陀本願の旨と説くこと明々たる。
 さう程ふ言口も定り本性房を黙然として信伏し早ぬ願真僧都ハ双眼
 よう紅涙とをが。集會の人々も悉く歡喜の涙と流し偏ふ飯伏渴仰
 源空重て曰く。予道世の當初より。衰老の中頃に至るまで。竊ハ一代の教文を
 披ひて借出離の要義と業をくふ。顯あつて密あつて開悟容易なり。事
 とい理とい修行成就が。一實圓融の窓の内外。當年即是の妙觀不
 ぼん。三密同軌の床の上ふ。今現世の證入と失ふ。然る間涯分と量
 て淨土と願ひ。他方と憑ぐ名号と稱ふ。誠ふ往生極樂の教行の直至
 道場の見是らう。有智無智誰の人の飯せざるや。而も諸宗の行人あり

ろく口称の念佛ハ偏ふ愚鈍の機ハ被りし。全く具言止觀の妙行ハ及ぶ。
 更ハ華嚴禪門の宗旨ハ勝る。一文不通の頑魯ハ於ての自往生の一路と
 修ふとつと。利智精進の根氣ハ至て唯現世の證入と期とへ。或云
 念佛往生ハ易きふ似て易き。如何とれば。十惡五逆と造るとんども。
 深く改悔の心と發して。後ハ重ねて之と犯さるがゆへ往生と遂る也。罪
 業と制止せざるハ縦名号と稱るとんども。往生とべん。又一念十念の往
 生ハ妄念異念と休息して。一心不乱ふ之行也。余念相交り妄心雜起せり。
 行業成とべん。故不知の念佛三昧ハ若し持戒清淨道心堅固の人。若し智慧
 深遠勇猛精進の徒。罪障と制伏し。余念と休息して是と修之と行とへ
 と。或ハ勝の儀と許せし易の義と許さる。あつて易の義をわらふすと
 勝の義と許さる。悲しひふ斯のどど輩。諛ふ其一と知つて未だ其二と
 知らず。伏惟ハ真宗の法門ハ稍古今ハ異らう。文の大意と知らざる乃人宗

熊谷蓮生房大原
五禪寺に至つて問
答の勝劣を窺ふ

蓮生法師は大原の
問答小律川の邊に
やまゝひて勝負の
善悪ふらして許多の
衆徒をも取むる
を以て勢いと堅啞
のんで窺ひし
遁世の身といふも
生質勇猛の
武士たり



時々奮
撃の強氣
と發する

まの



蓮生

の元由と辨つざるの輩安し小弘願他力の浄業と輕ちりて空しく聖道自
 カの修行不疲る極樂は是泥洹無為の界諸佛法王の家なり縦い利根之
 とも而も往生と欲せし。况や鈍根とや縦い上智ととも而も他力と憑
 り況や下智とや十方佛の中より唯往生の法のみ有り二も三もれ
 佛の隨縁の説と除く乞願く畢覺吳見の輩別解別行の人々邪雜
 の執とあなめて専修の門入へ。弘願の二稱の万行の宗致より誰は是と行
 こん果號の三字の衆徳の根元なり。敢く之を嘲るはなれ人として羨慕するの
 教門の暫く浅近不修んも自然に悟道の密意と究き是深奥なり。一念
 小佛意小契らんと欲ともこれ極樂と願ふ。一世の行業と成んと欲せば
 弥陀と念どべし於戲釋尊出世して衆生と濟度したまふ化道百億不
 遍く利益三千小普一化縁の薪盡く正像くや過ぐ。我等生と五濁六惡
 の末法不受く罪と四生十惡の業道不感と善根薄少なり。根性遲鈍なり

戒行持し定惠證し難し。妄つふ其分と在世の正機少く現世の證入を
 期まふ。暗く此身と正像の賢聖同く自力の得道と恃む。况や
 在世の頓悟頓入の多きは權化の示現。正像の得道得果。恐るゝ實業の
 衆生少く末代の機根不準望する。是當今の凡愚小比較と不及ざる者
 然るも弥陀の名号に於て。極善最上の法なり。造惡の凡夫も之も之も修
 らるべし往生も之も得る。他力難思の行なり。具縛底下るる之も之も信れ
 来迎不預る。此則ら念佛に於て勝易の二義あり。勝の義より謂く至極大
 衆の意の體の外名く。名の外體なり。万善の妙躰に名号の六字小即。洵
 沙の功德の口稱の一行不備。大願強力の構出する。万徳と行者謙與せ。他
 カ難思の巧方便なり。一稱と衆善不超過なり。知識廣讚まれ。猛火涼風と
 する。善友教を稱ま。金蓮果日の如く。大利の名号の無上の功德より易の義と云へ
 行住坐臥と論せば。是と修まれば来迎不預る。時處諸縁と謂は。是と唱まれば

往生と遠く是則ち身心の濁乱あり。唯他力の引接に依る故に凡聖道自
力の修行の罪惡と制止す。妄念と休息をせんが。其行成就するまで生死
罪濁の心泥。萬行水精の珠と穢との義譬して知るべし。此則ち珠の力用
弱き故に水清むと水澄むれば光色顯れざらば。本願名号の躰ありて
一生造惡の凡夫相續忘念の衆生も隨犯隨懺すれば衆罪と消除し唯願
唯行すれば淨刹に往生す。此則ち弥陀如来の至極無上の淨摩尼珠の凡夫罪
濁の心水に穢されし珠の他力強まると無量生死の泥濁。頭も無漏法性の清水
となる。譬して思ふに凡癡惡修善の佛教の正意なればも。廢されし
廢られざる何んせん。息忘修心へ行道の大途なればも。息も息も
も息もなれば何んせん。唯まがく弥陀の本願と憑ひて。只須く他力の名号
と唱へし。此則ち造惡の上の癡惡の法なり。妄念の中の息忘の行なり。佛法修
行の中も是より易きは有べざる而して。他力本願の名号。濁世末代機教相應して

三國一高僧傳卷第二

出離とて聞かむ。之を説きし。聽入る三百余人。一人を疑の心あり。人々
虚空よりかみ。言語と出する。碩徳の僧侶讚して云。形とれば源空入
實とて。應慈の弥陀如来を疑する。頭真僧都の落涙あり。一心丹誠と
抽んで自ら香爐とて持佛堂と旋繞し。行道して高聲念佛と唱ふ
南北の明匠を西土のよへ。信男信女參禮し。聽衆の老若の諸人心
の誠と疑。各異口同音。三日三夜の間高聲念佛と修する。其の
山谷に満。林樹と動く。故に信と發。縁と結ぶ人多う。頭真僧都の餘行と
置向專修の行者とて。自ら出離して。念佛往生と期する。其の非他
人とも。去はす妹の尼とて。勸め給ふ。念佛勸進の消息と遣る。
世間も流布して。頭真の消息と名づく。文章。真の宛書。文治三年十二月廿九日。護
摩堂尼御前。頭真專修の身とて。念佛と行。此の消息も明
り。又十二人の衆と定め。文治三年正月十日。勝林院に不斷念佛と

三國一高僧傳卷第二

五十六

始り行れし。顯眞十二人の隨一ありて。成の刺を勧りたまひける。開闢の夜十二人
 皆参り行道して同音の念佛と修する。毘沙門天王列ふまひける。顯眞
 眼前不持しひいと。又一の大願とまき此寺五房と建立し。一向称名と相續
 して。余行と交はれ勸りんと。其願空しむと終小文治三年十月成就しけり。
 池上の阿闍梨皇慶の旧跡。護法守護の靈地五房と建。楞嚴院安樂の
 谷とくく新安樂と号け。性智房境智房佛智房勝智房妙智房と号
 け。又遷教上人も願を發して。来迎院松林院ホして。不断念佛とそと
 なき。若此時まで。源空上人の勸化しむと半ありし。既小大原の間答ふ勝
 たりし。日本一州皈依まき繁昌し。有難し事ども有り
 大原公京師の北ありて。叡山の乾ふあり。八瀬の里北一里あり。若狭往返
 の街道あり。東西より八箇村あり。端カ寺村上野村大長瀬村来迎院村。此山
 門の別院凡四十八院ありて。左禪寺ハ勝林院の舟ありて。来迎院松林院

此別院の名ありて云。今大原小魚山勝林寺と古刹あり。是宗論ありし
 奮趾ありて本尊と證據の阿弥陀と称し座像ありて長七尺。佛の祖庸
 成の作り。寺記より當院一条左大臣雅信公の息少將入道寂源法師
 の草創あり。往昔叡山の僧都卒覚超同静慮院の偏教とて。凡智者の
 ひふ如来相好と隱し。偏教ハ空の義と立たまふ。おつて相好と顯しあり。
 然れハ中道實相と如来の本意とんとして。此お於て顯まぬ夫より世人
 証據の弥陀と称し。又文治三年の秋法然上人と山門の僧徒顯眞法印と
 始諸宗の碩学と一向専修の間答侍し。法然上人の談論あるは。本尊
 光明と故らわれと大原問答と。諸宗の知識と。上人の弘法と伏し。顯
 眞も忽ち専修の行者と。則ち法泉房も住めし。称名念佛絶まじ。此
 又寺門の傍小熊谷腰掛石。律川の橋の詰あり。蓮生法師此所腰掛。此
 又寺門の傍小熊谷腰掛石。律川の橋の詰あり。蓮生法師此所腰掛。此

問答の蓮生房鑑と袖ふり携て法然上人の供奉次蓮生云く師と對論ふり存
法融と打ちとる人の用意なりと上人を聞ひ大に制しやふりて捨と云傳ふ
等の古跡あり

時小俊兼房重源一の意樂と起して云く此國の道俗男女閻魔王宮に至
て跪く交名と答ふ時佛名と唱へん爲ふ阿弥陀佛の名と付てとく
先吾名と南無阿弥陀佛と是我朝ふりて阿弥陀佛の名と付て此時
より始すなりと云

今何阿弥と号するは
阿弥陀佛の略語なり

三國七高僧傳圖會本朝卷本終

問答の蓮生房鑑と袖ふり携て法然上人の供奉次蓮生云く師と對論ふけりて
法然と打ちとる人の用意なりと上人を聞ひ大に制しやふとて捨と云傳ふ

等の古跡あり

時小俊兼房重源一の意樂と起して云く此國の道俗男女閻魔王宮に至
て跪く交名と答ふ時佛名と唱へん爲ふ阿弥陀佛の名と付むとて
先吾名と南無阿弥陀佛と是我朝ふりて阿弥陀佛の名と付は此時
より始りしなり

今何阿弥と号するは
阿弥陀佛の略語なり

三國七高僧傳圖會本朝卷本終

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

